

尾崎喜八資料

第 3 号

Contents

彫刻／尾崎喜八	2
尾崎さんと高村さん—「聖母子像」をめぐって／北川太一	3
* 研究と資料*	
ロマン・ロランと尾崎喜八	13
ロマン・ロラン氏からの手紙／大正十一年	
ロマン・ロランの友等に／大正十五年	
或る会合／大正十五年	
大陸をこえて／昭和十年	
偉大なる師への私の感謝／昭和十一年	
渝らぬ感謝／昭和二十八年	
*	
ロマン・ロランと尾崎喜八・関係資料	25
新聞・雑誌掲載目録(三)、昭和七年～二十年	27
同・附記／嘉納忠明	
余白に／石黒敦彦	31
この一年の出来事／その他	32
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会
昭和62年2月

彫
刻

尾崎喜八

鉄銅にちぢめた

ミケランジエロのマドンナ。

それが高貴な頸筋から

豊かな背中の衣紋えもんへかけて、

もうまつかな夏の朝日を浴びてゐる。

戸外はけふも金剛石色にきらめく

ひでりつづきの烟の風景、

小屋の室内は隅々までも外光の反射。

しかもこの力づよい野天の中で

その美を固執する作品のすばらしさ。

私の毎日の仕事の指針、

自分の芸術に加へたい美。

今、夏の朝のみどりに明るい机の上で、
復興期巨人の要訣であるこの作品を
くちなしの花の高い匂がめぐつてゐる。





尾崎さんと高村さん

—『聖母子像』をめぐって—

北川 太一

一、砂川の土蔵

昭和三十一年の春、高村光太郎さんが亡くなつて、尾崎さんや草野心平さんのお骨折りで筑摩書房から『高村光太郎全集』が出ることなつた時、近親者を除けばおそらく高村さんの生涯にいちばん長くかかわり続けた尾崎さんは、沢山のことをお聞きして置かなければ、と思ひました。実際にあの時、全集刊行の推進役をつとめておいでだったのは草野さんですが、草野さんもまた尾崎さんを大切に思つていて、「刊行の言葉」は尾崎さんにお願ひし、実務を担当していた私の、月報にもできるだけ何度も書いていただきたいという希望に、賛成して下さいました。

結局、その企ては尾崎さんのお忙しさもあって二つの「思い出」、「ラコツチイ・マアチ」と「上河内」に終りましたが、これはいま読み返してみても、かけがえのないお二人の交友を語る文献になつています。

こんなことから書き始めたのは、実はその時から気にかかっている一つの事があつたからです。昭和三十二年七月の第四回配本、『全集』第六巻の月報に書かれた最初の文章は、いま「ラコツチイ・マアチ」として知られていますが、大正十年十二月の雑誌『明星』に発表されたはじめには、「ベルリオの一片」の題名と「ベルリオ自伝と書翰」の訳者わが敬愛する詩人尾崎喜八氏に献ず。」という添え書きを持っていた高村さんの詩に

関する回想でした。
詩における高村さんの決定的な復活、そしてその生涯の一つの峰ともなつた「雨にうたるるカテ・ド・ラル」と、これもまた尾崎さんと一緒にあります。しかし、それ以来いつも心の中になかで作られたかを、二人の詩人の息づかいが聞えるほど生々と、この文章は写し出しています。あつたのは、次のような一節でした。

「高村さんはその『明星』を私に送つてくれただけでなく、この長い詩の全文を鳥の子紙に墨を使つて金ペンで細書して、おまけにその字の上を、鯛の牙で磨いて、出しをして、絹の打紐で綴ぢた美しい小型の本にして贈呈してくれた。私はその時の感激を今日でもさまざまと思い出すことができる。その記念の自筆本は今下砂川町の農家の土蔵の中に眠つているはずである。」

昭和二十年五月青山南町六丁目の家を失つた尾崎さんが、終戦をはさんで半年ほど寄寓されたのは、当時の高村さんの人名簿に「北多摩郡砂川村四四」と記されている親戚、尾崎梅太郎さんのお家でした。

高村さんの全集を編んでゆく道すじでは、実にたくさんの方々から、たくさんの資料や助言をいただきました。さまざまに示唆を尾崎さんからもいたいたのは当然のことですが、残念なことに、尾崎さんのお家には全集に関する資料は、ほとんど無かつたのです。

いま僅かに記憶に残っているのは、尾崎さんの坐右にあった The Scott Library に入っているハイットマンの "Specimen days" でした。高さんは大正十年九月、『自選日記』としてその翻訳を刊行した時、序文でこの版本に触れていますが、尾崎家にあつたのは、まさに高さんが身辺に置いて参照した署名のある旧蔵本でした。本文にしばしば現われる動植物名は高さんを悩ませたものの一つですが、自然についての尾崎さんの知識は、高さんの仕事を助けました。そのためこれには尾崎さんの手もとに移されたものでしょう。組み方に杜撰なところのある訳本の章節を訂すのに、この本は役立ちました。

しかし、例え尾崎さんに宛てた高さんの書簡に至っては、一通の現物も有りませんでした。あとでその幾つかがみつかりましたが、おそらく百を単位に数えなければならなかつた筈の手紙です。全集に收められた唯一通の手紙は大正十一年六月号の『詩聖』から転載したもので、親愛と期待に溢れます。

「御葉書見ました。あなたの二つの詩集を私がどんなにたのしみに待つてゐるかは、恐らくあなたの想像以上でせう。あなたが詩の世界に出来た事は、私等の心強さを増す事です。

唯一至上のもの、さうです。それより外はありません。その命ずるままに各自が生きるより外は。そして日常の瑣事が悉く光を發して詩歌となる世界へ入る事です。

私はこの頃自分の内の火の、自分一個のも

のない事を驚き感じてゐます。この炎に形を与へることこそ一大事。」

充実し、緊張した手紙のやりとりが、数繁く行われたることは、この一通の書簡からさえ想像できます。そしてそれがいま残つてたら、素晴らしい往復書簡群が、日本の近代にかかるある人間精神発展の歴史を、直接に証言しただらうと思います。不幸にして高さんのアトリエは尾崎さんの手紙も含めて鳥有に帰しました。尾崎家にあつた高さんの手紙類も、同じ運命をたどつたのでしょうか。尾崎さんはその形成期から抜き難い敬愛をもつた高さんにまつわるさまざまなもの、ことさら大切に戦禍からまもるため、一括して保存しようとしたのです。転々とする戦時の生活の中で、たいて磨かれたあの詩稿を取り出す用意のあつた尾崎さんなら、それはありそうに思われます。そしてそれがもあるとすれば、砂川の土蔵に違ひありません。

尾崎さんの生前、土蔵の整理について、何度も触れたことがありました。折を見てとういうお返事のまま、そのことはとうとう果されずに終りました。おそらく尾崎さんは、かえりみることよりも、豊饒な収穫の季節にお忙しかったのだと思います。

二、聖母子像

と書いた尾崎喜八研究会が発足し、翌年二月の蠟梅忌には『尾崎喜八資料』が創刊されました。砂川町の土蔵のことが新たに思い起されたのは、そんな機運の上でだったでしょう。については、栄子さんや敦彦さんが記録して置いて下さるといいと思います。

四月二日は高さんの連翹忌で、いつも実子夫人がおいで下さいますが、三月に入つて夫人から、出席のお返事とは別に「珍しいものが出て来たから写真をお見せする。おたのしみに。」という意味のお葉書が届き、この年の連翹忌はこと更に心はずみました。そしてその時、砂川の土蔵から出て来たのだ、と言つていただいたのは、思いがけずブロンズ像だけ写した方はピントがはずれていてなんとも見分けがつきませんでしたが、縁側に腰かけて、夫人が膝に抱いているのは、高さおよそ三十三センチほどの母子像のようです。「焼けたとばかり思つていたが、高さんからいただいて、尾崎がいつも机の上に置いていたもの。」そんなあらましのお話でした。高さんが母子像を作つたということは聞いたこともありません。ともかくももつとはっきり写つた写真が欲しいと、重ねておねだりしたことでした。四十年ぶりに手をつけた砂川の蔵からは、尾崎さんが写した六百枚にも及ぶ手札サイズの乾板が現われたという話も伝わつて、期待はどこまでも広がつてゆきました。

その待ち望んでいたブロンズ像の、おまざ

十九年秋、いつか「木の実がうれるように」

まな側面から写した五枚の写真が届いたのは、六月も二十日を過ぎた頃でした。

あきらかにこれは西欧の母子像です。うつむき加減の母は物思い、幼児は母の膝で、おそらく乳房を求めているのでしょうか。写真からだけでも、その気品あるやすらぎに満ちたおもかげは感じられます。そして驚いたことに底の部分には、高村さんの手で、金色の絵具を使ってこんな文字が書かれているというのです。

大正十三年／三月／二十日／贈之／光

尾崎喜八／水野実子／両君結婚の日

ブロンズの底に金色の絵具で署名する先例

は、よく知られた「裸婦坐像」の場合にもあります。これは疑いもなく高村さんの、尾崎さんご夫妻への結婚のお祝いです。それにしても「贈之／光」が作り手としての署名を含むものなのか、或いは単に贈り手としての署名なのかに戸惑いました。自分の作品とすれば高さは二六・五センチ、幅は台座のところで一〇・五×八・五センチだと言います。

明らかに高村さんの贈り物であるこの母子像には、これをことさらに新しく出発するお二人に贈った意味がある筈です。どうしても実物を見せていただかなれば、と思いながら、どれほど白黒、八つの写真の母子像を眺めていた事でしょう。そして不思議な思いに駆られながら眺めていた母子像が、いつか親しく、見馴れたものに思えてくるのに気が

つきはじめました。「どこかで見たことがあります」思わず「あっ」と声をあげました。「ミケランジェロ！」書架にとんでいいて取出したのは、戦後間もなく土方定一さん達が編集して刊行された平凡社の『世界美術全集』第十七巻、この「ルネサンスⅡ」の巻には、高村さん自身が力のこもったミケランジェロ評伝を書き、幾つかの作品解題ものせていました。もどかしく頁を繰ってもう一度声をあげました。発見した「聖母子」の図版は、その角度も大きさも、尾崎家の「聖母子像」の写真と瓜二つではありませんか。高村さんはこの作品に、こんな解説を書いています。

「これもサン・ロレンツォ寺のサクリスティに置かれている大理石像で、置き場所は後人の配慮のまま甚だ不適当なものになつてゐる。この大理石像はミケランジェロのよさをしん



『聖母子像』の基底部裏側。(撮影／星修)

喜八、実子の結婚を祝うため、

高村光太郎のサインが金色の絵具で記されている。

から語っているものと私は考えて、多くの人の鑑賞以上に高く見ている。これも九分通りの完成だが、その彫刻としての美質は筆紙に尽しがたい。質朴な、謙虚な、苦労に耐えた、この中年の女性。題は聖母であるが、たしかにこれは当時の一般市民階級の一母性を心に抱きながら作つたにちがいないと考える。この一つの唐突な突起もない彫刻、じみな手法、衣服のひだの控目な彫り込み、右の腕による右側面の平坦さ、これらに対する左側面の変化、すべてが彫刻そのものである。」

この大理石像は、高さ二〇七センチ、ミケランジェロの一五二四～三二年の作品。明治四十二年三月三十日から四月二日にかけてのフィレンツェ滞在中、若き日の高村さんは、どんな思いをこめてこの「聖母子像」を仰ぎ見たことでしょう。素材もちがう、大きさも勿論ちがう大理石像の、造型構造にまで及ぶ解題には、遠い日の感動がたちこめ、ふと尾崎家のブロンズ像について語つていて語つてゐるような錯覚さえ起させます。

この「聖母子像」なら、それをどんなに心をこめて高村さんが賛嘆したか知っています。現に同じ本の評伝の中でも特にこの像に触れ、「殊にこの『聖母子』こそまさに『彫刻』というに値する至高のものを持つていて『ダビデ』や『モーセ』よりも上である」と言葉を極めます。そう言えばもつと印象的な、もつと情熱的な「聖母子」贊歌を高村さんはどこかで書いている筈です。そしてそれは、すぐ見つかりました。このブロンズ像を尾崎夫妻に

贈った翌年、高村さんは『アルス美術大講座』の中に、彫刻の歴史をたどった『彫塑總論』という文章を書きました。その中のミケランジエロと「聖母子」を語る部分は、このプロンズ像を尾崎夫妻に贈った高村さんの想いを、同じ時点で解き明していると言つていいでしょう。読んでいるとなんだか眼がしらが熱くなるようなその文章を、すこし長いけれどここに写し取らないわけにはいきません。

「彼の深い精神的な美は、彼の彫刻に、彫刻始まつて以来殆ど比較す可きものも無い内在的の力を与へました。彼の彫刻の彫刻的なのは、量に対する造型的本能の強さから来る事の外に、彼の精神の内奥にある最も敬虔な、（最も敬虔なるものは常に彫刻的である事に注意せよ）最も静謐な光明の明暗からも來ました。此を最もよく物語るものは、彼の彫刻の中でも最も彫刻的な、メヂチ家の菩提所にある『聖母子』の大理石像であります。私は此程人に迫つて来る彫刻を多く知りません。何といふ氣高い、質素な、端麗な、さうしてやさしい愛に満ちた、内の力と美とに恵まれた彫刻でありませう。その彫刻的構造と内に持つものとの此ほど渾一した彫刻も多くはないでせう。人体の此程彫刻的な創造も多くはありません。それは極めて大きな数個の面で出来てゐるだけで、しかも言ひ知れぬ魅力がその間の起伏に潜んでゐます。ミケランジェロの言葉だと伝へられてゐる言に、山の上から転がり落ちても害はない彫刻こそよい彫刻であるといふ事があります。その伝の真偽

は知りませんが、此の説には確かに或る真理が含まれてゐます。最も彫刻的なるものは、斯の如き場合に害はれる所は害ひ尽して後に残つたものであると思ふからであります。ミロのヴェヌスは結局手の無い方が一層彫刻的であると思ひます。此の『聖母子』は斯かる考察から見ても亦最も観智に満ちたものであります。その直線に近い一側面の何といふ、高潔な事であります。その斜めにうつむいた首の何といふ美の深さでせう。さうして此の静かさ、此の安らかさ、此の清浄さ。」

何のつけ加えるところがあるでしよう。早くから高村さんに敬意を持ち、さまざま才能を秘めながらいま花咲こうとしているその

詩人と、生涯の友葉舟水野盈太郎の愛娘、出版の合図を告げる二人のために、「気高い、質朴な、端麗な、さうしてやさしい愛に満ちた、内の力と美とに恵まれた」生涯があるよう、高村さんは人間の生んだこの最も素晴らしい母子の表現を贈つたに違いありません。

彫刻の造型的な構造に立てる高村さんの文章を見ても、そこにはただ眺めて会得した結論ではなしに、自ら土を取つて模刻し、学び、納得したあとがうかがえます。同じような勉強は、渡米中に試みた師ボーグラムの「ラスキン像」の縮小模刻にも見られます、おそらくこの「聖母子」も、高村さんの真剣な勉強の一つだったと思われます。

新らしい夫妻にそがれるそんな直接の願いに併せて、もう一つの事実も付け加えて置く価値があるでしよう。大正十一年六月岩波

書店から、高田博厚さんの最初の本、コンディヴィ『ミケランジェロの生涯』の大冊が刊行されました。その訳者序の一節、

「この稿は昨年の六月に始めて十二月に終つた。……その間夏から冬にかけて私は親友尾崎喜八君と同じ家に住んでゐた。尾崎君はこの書の後に出るユーディト・クラデルの『ロダンの人と藝術』を訳してゐた。（後不時な災難の為に同君はその原稿の半ばを失つたけれども）、昼夜、互ひに自分の仕事と翻訳にいそしみ、昼夜自身の仕事に没頭した事に勇氣附けられて、夜訳筆を取り上げたあの生活を、私は忘れる事が出来ない。この本の出るのは楽しみにし、励ましてくれた同君の友情に感謝する。この書をその記念ともしたい。」

そしてその書の巻末にそえた百四五の写真図版とは別に、特に巻頭に一枚だけ選んだ口絵が、この「聖母子」だったのです。東京外国语学校を中退した二十二歳の青年を岩波茂雄に推したのは、高村さんでした。高村さんをめぐる精神圈のなかで、ミケランジェロや「聖母子」像への愛が共通の了解の中につたことは、そのことからも推測できます。この本は翌年の震災で焼けて長く稀覯の書でしたが、昭和五十三年二月、岩崎美術社から増補改訂した新版が出ました。但しこの版には「聖母子」の図版は見られません。

昭和二年二月号の『婦人之友』に発表された高村智恵子夫人のエッセイ「画室の冬」はロマン・ロランの「この世界に本当のヒロイズムの形式は唯一つかない。それは世界を

あるままに見て愛する事。』という言葉で終つていますが、これも『ミケランジェロの生涯』の序の中の言葉でした。

三、三月二十日

水野さんとも高村さんとも親しかった特異な田園の思想家江渡秋嶽夫人ミキさんの日記

(昭46・4『ミキの記録』三萬園)は、大正十三年三月二十日高井戸の江渡家の結婚式をこう記録しています。

「尾崎さんの結婚日なり、お母さんお出でになり、水野家よりは御母堂、大久保さん、高村さん、水野さんお出でになる。尾崎さんより、折を五人分頂く。吉田先生お出でになる。金久保さんも来らる。」
この日尾崎さんの介添えをしたのは江渡さん。実子夫人の介添えは高村さんが引受けました。

年代記風に書いてみると、尾崎さんが京城の朝鮮銀行に赴任したのは大正八年十二月、翌年には銀行勤めに見切りをつけて東京に帰り、本郷西片町の下宿に住んで詩を書き始めます。高村さんのところには歩いて行ける距離。高田さんと出会ったのはその駒込林町のアトリエでした。一緒に住んだのもこの下宿でしょう。そして同じ年、高村さんに伴われて平塚村下蛇窪の水野家を初めて訪れ、満年齢で言えば十五歳の長女実子さんとの運命的な出会いを持つのです。以後水野家への訪問は足繁く、実子さんは恐らく、詩人形成に

最も大きな役割りを果たしました。嘉納忠明さんの編んだ丹念な書誌(昭60・2『尾崎喜八資料』創刊号)を見ても、大正十年詩人としての出発の最も早い時期に、「まるでシンデレラのやうに／いつも一人でせつせと働く、カティージ メード」が現われます。そのあと、詩は、

それでも愚痴をこぼさずに、

心から明るく楽しそうに、

私達の魂の欲しいとあこがれてゐるものをお互ひに精励して、正しいりつぱな者になりました。

ごらんなさい、頭の上を、あの高いところを。

添え書を持ち、こんなふうに終ります。

美しい空、美しい雲ですね。

その年十二月に水野家に近い一軒屋を借りて移り住んだ尾崎さんは、翌大正十一年五月高村さんへの献辞も含む最初の詩集『空と樹木』を玄文社から刊行するのです。この頃、尾崎さんに宛てた高村さんの葉書が一通見つかっています。

「この間直接にあの方からいろいろお話を聞いてすっかりよくわかつたやうな気がします。よかつたと思ひます。事柄は至極簡単です。さういふ祝福された日がいつか来る事をあなた方の為にいのらずにはゐられなくなりました。いづれ又」(大11・6・23)

二人の意志を高村さんは肯定します。「一行として書かざる日なき」精進が続き、ロマン・ロランからの手紙も届きます。島津謙太郎の名にかくれて誰よりも早く、本格的な「高村光太郎論」(『詩聖』)を発表したのは翌年五月。八月号の『日本詩人』には、高村さんと長い回想を含む「古いこし方」が掲載されます。この文章では交友の経緯にゆっくり触れているゆとりがないでどうから、せめて

微笑んだり夢みたり、
いろいろと毎日の事を工夫して見たり、
ときたま亡くなつたお母さまの事も考へる
が、
それを思へば尚更善くならうと云ふ気にな
つて、
暗い心を取り直して
夢と一緒に実際にあたり、
掃いたり、縫つたり、洗つたり、
種を播いたり、虫をとつたり、
お前の世界のよく働く女王さまになつて、
無くてならない大切な人になつて、
座敷でも、台所でも、
裏庭でも、花壇でも、畠でも、
いたるところにお前の顔を輝かせ、
お前の頬をほてらせながら、
やつぱり抑へがたい十七の夢で一ぱいだ。

と続くのですが、もとの詩は何倍も長いものです。また同じ八月号の『新詩人』に発表された詩「田舎の夕暮」は「(水野実子に)」の

長大な詩篇の一部だけでも引用して置きました。

むかし 角帯も堅気な町息子の頃から、

けふ、物を書く身になるまでの遠い十年を

眺めかへせば

運命の糸のもつれに氣を腐らせて君をたづ

ね

愚かな打明けに君を困惑させたのもいくた

び

それでも其処の仕事場のモデル台に

どつしり腰をおろした君の真率な同情や励

ましから、

この幾年、愛せられ、護られ、慈しまれ、

すらすらと樹木のやうに伸びて來た。

あゝ、雪の夕ぐれ、

その窓枠に塩のやうな粉末のつもる時、

太い松薪のちらちら燃える暖炉の前で

「智慧」のどんな幾篇を私のために君は読ん

だか！

また天の高く、水晶を溶いた秋風の吹きわ

たり、

庭の雁来紅、日を浴びてしんと立つ十月の
時、

その彫刻に土をつける君の黙々たる仕事着
の姿から
芸術へのどんな熱情を私はとりもどした
か！

思想のニュアンス、生活のリトム、

一切の確かなものに纏装されて

壯年の海の大きな浪間に私は乗り出した。

高村さんは九つ違ひの尾崎さんが、初め

て高村さんのアトリエを訪れたのは、明治末

年か大正はじめの頃ですが、忽ち深い共感に

結ばれ、大正三年高村さんの詩集『道程』が

出た時には、扉にフランス語で聖書の一節「無

くて叶はぬものは只一つなり。マリアは善き

かたを選びたり。こは彼より奪ふべからざる

ものなり」を書きつけたその詩集を、わざわ

ざ尾崎さんの勤め先にまで自分で届けたほど

でした。「尾崎喜八君とはよく炉辺でヴェル

ハアランを読み合つた楽しい日の数々を思ひ

出す。」（昭14・10「詩の勉強」と書く高村

さんの回想も、「古いこし方」を裏づけるで

しょう。

関東大震災を契機に、尾崎さんは長く行き
違つっていた父上とも和解し、江渡家に近い高
井戸村大字上高井戸に新居を建てます。『ミ
キの記録』はこの頃の江渡家をめぐる沢山の
人々、高村さん、水野さん、尾崎さん、高田
さん、鳥谷部陽太郎さん、足助素一さん、更
科源蔵さんなどの動きを書き留めていて興味
があります。そして大正十三年三月二十日が
来るのであります。尾崎さん三十二歳、実子さん十
九歳。六月に新詩壇社から刊行された第二詩
集『高層雲の下』は一つの区切り。武藏野の
田園に新しい二人の生涯が始まります。

という文章のなかで尾崎さんことを「まつ
たく彼は『渝らぬ友』だと思へる。彼は中々
敏感で一種の感情家で潔癖家でもあるから、
もう手紙など書かないぞ、といったやうな
顔でもしてゐるらしく想像される時もないで
はないが、いつのまにか又『オルドラ
ング サイン』で、相變らず熱烈で正しい。
私は同君の友情を生涯での貴い喜の一つとし
てゐる。誰にだつてあるやうにむろん尾崎君
にだつて弱いところは中々あるが、その弱さ
の由つて来る所を考へるとその弱さにも愛が
持てる。時々は愛嬌にもなる。」と書いたあ
とで、実子夫人についてこうつけ加えていま
す。

「もう一つ。此を書くのを忘れてはいけない。
尾崎君に『みいちやん』がついて居ることだ。
実子さんは日本のマダムの最も好い手本であ
る。この小父さんは実子さんを知つてゐる事
が馬鹿にうれしい。実子さんの事ならいつで
も二挺ピストルの役をつとめる氣で居る。」
実子さんのお父さん、水野葉舟さんは盈太
郎が本名で、高村さんの本来の呼び名は光太
郎でした。このよく似た名前を持つ二人は、
生まれも同じ明治十六年で、高村さんは三月
十三日、水野さんは四月九日。水野さんが生
まれたのは東京下谷の仲御徒町、高村さんも
五歳から八歳までその町で育ちました。水野
さんのはじめの奥さん、実子さんのお母さん
が智恵子さん、高村夫人も智恵子さん、とこ
う書いてみると偶然とは言え、その不思議さ
に驚かされます。

明治三十三年、与謝野鉄幹の新詩社に加わり、いっしょに『明星』発送の宛名書きに精出した頃から、気性も環境もまるでちがう二人の、あとで高村さんが「私のたつた一人の生涯かけての友達だつた。」と書く交友は始まりました。

「私は當時美術学校の生徒であつて、所謂青年の憂鬱に捕へられて苦しんでゐたのであるが、其頃水野蝶郎といふ名で花やかな、明るい歌を書いてゐた水野君に不思議にひきつけられて、その美男子ぶりとおしゃべりと人なつこい人と爲りが忘れ難く、忽ちの間に大の仲よしとなつた。……互に訪問しては果てしない散歩につれ出し、歩きながらあらゆる問題に触れて語り合つたものであつた。鷗外の翻訳、国男、藤村の詩から、多田親愛のかな文字の書に至るまで、凡そ問題になるものは悉く取り上げてよく激論した。」（昭22・3「水野葉舟君のこと」）

故あって水野さんは翌年新詩社を退きますが、もちろん交友はますます親密に、明治三十七年夏には、二人の文学的な生涯にとつて大切な意味を持つ赤城山滯在がやつて来ます。

赤城での二人のことはいつか『アルプ』（昭50・5）に書きましたが、水野さんはそこから沢山の恋文を、のち智恵子と呼んだ丸毛千枝子さんに書き送っています。

「30th July

千枝さん二十四日から雨が降りつゞいてゐる。こゝの淋しさといつたらとも、とても想像に及ぶことではない。僕はこゝに来て

から、どんなに、様々の事を考へたか、どんなに千枝さんと二人の未来の事について思つたか、僕は殆んど、何事をもする隙のない程自分の思ひにあけつた。大沼の清く、すゞしい姿も、白かんばのきれいな影も、牧場のみどりも、皆、僕には、その思ひを深くさせるものとなるので……僕の思ひの中に、千枝さんは古くなつて、また新しくなる。僕はその思ひに誘はれて、このさみしく、様もない生活の中にも独りたのしいものを抱いてゐる様に思はれてゐる。」

長女である実子さんが誕生したのは翌年九月。実業界に押出そうとする父にそむいて文学の道を選び、二人で棲んだのは小石川閑口台町の家で、その頃にはもう高村さんのアメリカ行きのこともほぼ決まっていました。

高村さんが三年の米欧留学を終えて帰ったのは明治四十二年夏ですが、手もとに明治四十五年六月の日付が書き込まれた二枚の写真があります。水野さんが前年から住んだ渋谷町中渋谷のお家の、一枚は室内で、一枚は庭で写したもので、水野さんの他には高村さん、窪田空穂さん、柳敬助さん、徳田秋声さん、

前田晁さんの顔が見えます。実子さんは間もなく七歳。お祖父さんの家から小学校に通っていた頃でしようか。柳さんや明治四十三年に亡くなった荻原守衛さんは、多分高村さんを通じての水野家の友人だったと思われます。その明治四十三年に柳さんが当時四、五歳の実子さんを描いた「紫とピンク」という油絵の写真が残っています。これは七月、高村さ

んが経営していた琅玕洞での最初の個展にも出品されたもので、画題は高村さんの命名でした。長いおかつぱ髪の、このエンゼルのように美しい、つぶらな瞳で外界をみつめる少女像について、当時の評論家坂井犀水は「就中、『紫とピンク』と題した少女の顔が、予に取つては、深き印象を与えたものであつた。その簡潔な、真摯な筆触と、美しく調和された簡単な色彩との裡に、柳氏の人格が躍如として表現せられて居ると思つた。」（大3・3『美術新報』）と書いています。高村さんはもちろん、水野さんの周辺のすべての人々から、この美しく利発な少女は愛されていたのだと思います。いまは所在の知れないその油絵が、どこからかふと現われてはくれないでしようか。しかし悲しい思い出も、この中渋谷の家にはありました。大正四年六月のお母さんの死です。重いお産で亡くなつた妻を悼んで一息に歌いあげられた水野さんの詩集『凝視』（大4・7）は、その成り立ちは違つても、直ちに高村さんの『智恵子抄』を連想させます。水野さんはその序文にこう書きつけました。

「私はこの人に向つて、生前には最もあらはな戦ひを挑み、互に相苦惱した生活を続けて居りました。それに依つて私達は次第に深く相欺かない心になつて居りました。この人は私のこれまで知つて居る女性の中で私の最も信頼して居た一人であります。この信頼と争闘とは、私達の友情であり、また愛であります。」

この人の死後に於ては、この人は全く私に浸透し、新しく私の内に生きようとして居ります。」

詩は六月二十四日夜の「一 われ、今御身にもの言はん」に始まり、おそらく七月二十日頃の「29 碑銘」、「その生きて居た日には／からだ全体が人を愛し／静かで、黙つて見衛つて居た。／今／この人の一生は口をつぐんだ。」に終り、哀切な情感は心を打ちます。この年八月に移った平塚村下蛇窪の家のこととは前にも触れましたが、その時期の生活は、実子夫人自身の回想「思い出すことども」(昭56・5『アントロボス』アントロボス編集委員会発行／イザラ書房発売)をお読みになるといいでしょう。毎日の時間割が決まつていて、学校の代りに家庭で教育を受ける——高村さんは絵の先生でした——この少女、母のない家庭の長女として、自然にカテージ・メイドの役割を引受け此の少女を、子供のいない高村さんがどんなに愛したかは、想像できます。実子夫人もつづましく「私達子供は『高村の小父さん』は大好きで大事な小父さんと思つていました。特に私はどういうわけか小さい時から可愛がつていたといいました。」と書いています。今でも実子夫人が「高村の小父さん」という時、その語調にやさしい特別な思いが込められ、尾崎家には実子夫人が十二歳の時「高村の小父さん」にいたいたオルガンが、古色を帯びて宝物のように飾つてあるのです。確かめようもありませんが、高村さんが尾

崎さんを連れていたのも、いとによつたら、この一途に燃えるような青年を、実子さんに引合せたいつもりがあつたかも知れません。

五、『私たちの本』

一九二三年は大正十二年ですが、それも関東大震災の直前七月二十六日に、水野家の回覧雑誌『私たちの本』の第一輯が出来上りました。原稿用紙を綴じた本文七十四頁、それに十頁のローマ字文や、読後感を書き込む余白を併せて百頁を超えるこの雑誌の作り手、実子さんは本文のあとに「編輯者の言葉」を書いています。

「幾度も、はじめては止め、止めてははじめた、私達の本を又新しい気持ちで作らへる事にしました。

久枝さんと二人でやる事に相談してゐた時に、お父さんも丁度考へていらして、私達にやらないかとおつしやつた。

それで今度は大人の方達も一緒に入つて頂いて、一生懸命やる事にしました。

私達にとつてはどんなに幸福な事かわからぬと心から嬉しく思つてゐます。

今月はまだ何も用意が出来てゐなかつた為に、一日とぢるのがおくれました。

これからは、毎月廿四日を原稿の〆切日とし、廿五日に繰り返す事にきめました。

回覧順は尾崎喜八、高山金一、木村莊太、宮崎大二、島山鉄造、今井武夫、高村光太郎、宇多五郎、天羽良司、宮田富三郎、江渡幸三郎となつていて、

Kiregire na Kotoba Mizuno Michitaro 4	Uta wo utau Nohara (uta)	Mizuno Michitaro 1	
手帳の中から.....水野 実子	水野久枝訳 古い道を歩きながら (詩) 水野 実子	平塚 二郎	
感想断片.....尾崎 喜八	感想と小詩.....宮崎 文二		
世界で一番上手なうそつき.....	プロレットカルトとして文学に就て.....		
感想断片.....尾崎 喜八	平塚 二郎		
水野久枝訳 古い道を歩きながら (詩) 水野 実子	水野 久枝	12	20
編輯者の言葉.....	宮崎 文二	9	9
72	68	32	32

私はこの本に自分の書いたものを出す事を、本当に恥かしく思ひます。
が、自分が少しでもよくなりたいと思ひます。「下さいませ。(略)」

卷末に白い紙を沢山つけておきますから、お読み下さいました方は、どうぞ批評をおかれ、「下さいませ。」

大人の方達もと、その内容は、それぞれに興味をひきます。

ロシヤに於ける追放人の生涯.....

ヘビクボ・スマールヒト

蟻と蜘蛛.....水野 久枝

感想と小詩.....宮崎 文二

プロレットカルトとして文学に就て.....

平塚 二郎

感想断片.....尾崎 喜八

世界で一番上手なうそつき.....

感想断片.....尾崎 喜八

水野久枝訳 古い道を歩きながら (詩) 水野 実子

編輯者の言葉.....

72

68

32

32

54

54

写し取りたい誘惑を感じますが、ここでは見
本のように、初めの幾つかを紹介する他あ
りません。

1

正義でない事はとても見てゐられない。直ぐ心が煮えくり返つてしまふ。憤慨の為に。

働く事はいい事だ、心が快活になるから。

いつでも人の太陽でありたい。

自分が間違つた道を歩いて來たと思つたら、
なげいてゐずに、その時から正しく生きるよ
り他にない。

○自分の不快さを他人に迄感染させる事は悪い事だ。

C

憎み！　こんないやなものは本当にはない。」

卷末に書かれた尾崎さんの読後評

あなたの健気な心に読みながら涙ぐんだ。素朴な僅か数行のものが後から後から出て来るが、それが苦しいと同時に僕をよろこばせたあなたは強い魂を持つてゐる。その弾力に感心する。その内、自然に就ての感想（家のまはりの）を見せていただきたいと思ふ。」

そして同じ実子さんの詩。

古い道を通りながら



『書斎の一角』 萩窓自宅二階八畳
昭和7年10月27日午前11時

暫らく通らなかつた古い道！

太陽が昇つたばかりの美しい、朝露の中でこんなにも美しい色々のものを輝かしてあ

縦横無尽に作られる道の為に、
わづかにくづしのことされ
尚、生命のつゞく限り強く、
与へられた力の限り生き——と
生きられる事の感謝と喜びにあふれた色

与へられた力の限り生き／＼と
生きられる事の感謝と喜びにあふれた色
むかし感じたやうな尊さと立派さ、
むかし感じたやうな美しさで、

花を咲かせてある。

生命の終るその時迄も
唯一人生きのこされて
この花のやうに

この世でわづかに、くづしのこされた、
太陽のある、樹陰のある、朝露のある、
美しい生のあるところで、
心の花を咲かす事を祈つた。

初夏の或る朝

写していくても、洗われるようにならしくなります。高村さんの処にこの手造りの本が廻つて来たのは八月十八日。水野さんの「詩はまづい。」という一言の裁断に対し、十九日にはたちどころに、愛情に溢れ、ひとりでにほほえましくなるような読後感が書き添えられます。やっぱりこれは、写さずには通れません。

あんなに愛してゐる事を読んだ時です。ヤブカラシはどういふものか僕も小供の時から好きでたまらない花でした。あの小さい独楽のやうな形をした実が出来る——いや実ではなくて花盤かしら——いくら見てもわからないのですが——おまけに僕はあの花がヤブカラシといふ名前の草だといふ事は今年の春頃やつと知つたのです。

ヤブカラシといふ名前は前から沢山聞いて居ながら、あの花がそのヤブカラシだと知らずに居たのです。貧乏ヅタともいふのだと聞いて随分人間の命名心理のユウモラスなのに微笑しました。つひ先達て早朝の散歩にこの花を飽く事なく写生したりした後なので、あの詩が特にあの花を書いてあるのによろこびました。立派な花はもちろん立派で愉快ですが、僕は又一般に雑草と言はれてゐる草の花が妙に好きで飽く事なく見たり描いたりします。その生活力の旺盛なのも快く思ひます。見てみると妙に心を引立たせてくれ、落つかせてくれ、自分の生活に不思議なたりを与へてくれます。あの詩に全く同感しました。

言外に實ちゃんへのぞつこんの惚れこみ方がうかがえないでしょうか。そしてこのそれとなく勇気づける高村さんの心遣いを、実子さんは敏感に受取ったに違ひないと思ひます。この本が何轉まで続いたのか、私にはわかりません。しかし、間もなく大地震が関東、東海地方を襲い、水野さんは一人三里塚に移つて、尾崎さんと実子さんの新しい生活が始まるのです。

くどくどと書き続けて、まだ書き足りないものでしかしが残りますが、あのミケランジェロの「聖母子像」模刻をお二人の出発のため送つた高村さんの思いの内には、こんなにもたくさんの親愛と願いと祈りとが込められていたということを、なんとかお伝えしたいと思つたのでした。

それにしても、尾崎さんの側からのこの像の記録はないものでしょうか。当然有つてもよさそうに思われます。そしてそれは、この文章をほぼ書き終つたあとで、それこそ天からメッセージのようにやつて来ました。

この尾崎さんの詩は大正十三年八月号の『日本詩人』に、他の二篇と一緒に載つています。詩だけ読めば「鋸銅にちどめた／ミケランジェロのマドンナ」が何を指すのか戸惑うでしょうが、いまはそれがまさにこの「聖母子」であることを、疑いもなくお感じになるでしょう。

コンディヴィの本の口絵のことを教えて下さつたのも、この詩をみつけてコピイを恵まれたのも、尾崎さんの資料蒐集に無私の執念を燃やされる嘉納忠明さんでした。嘉納さんの緻密な、終りを知らないお仕事がどんなに大切なものが、お礼の言葉も無いほどです。

ロマン・ロランの友の会や『東方』につながるその後の尾崎さんと高村さんの歩み、高村さんが「詩をすてて詩を書かう。／記録を書かう。／同胞の荒廃を出来れば防がう。」と書き、尾崎さんが「ひたすら同胞のすべての清からんことを」と祈つた戦時の二人の闘わりや、戦後の山林生活のことなど沢山の宿題を残しながら、もう尾崎さんと高村さんをめぐるこの文章を終らなければなりません。

敦彦さんの大きな鞄から、大事に幾重にもつつまれた「聖母子像」が実際に目の前に現われたのは、昨年二月一日の蠟梅忌の席上ででした。そのプロンズ像を膝にだきながら、この小さな彫像に込められた、よきさまざま人の思いの重さをいまさらのように感じ、稀有な人々の友情の記念が、戦禍を越えていまここにあるという奇蹟のような出来事を、改めて心に思い調べたことでした。

彫 刻

鋸銅にちどめた

ミケランジェロのマドンナ。

それが高貴な頸筋から

豊かな背中の衣紋へかけて、

もうまつかな夏の朝日を浴びてゐる。

戸外はけふも金剛石色にきらめく

ひでりつゞきの烟の風景、

小屋の室内は隅々までも外光の反射。

しかもこの力づよい野天の中で

その美を固執する作品のすばらしさ。

私の毎日の仕事の指針、

自分の芸術に加へたい美。

今、夏の朝のみどりに明るい机の上で、復興期巨人の要訣であるこの作品をくちなしの花の高い匂がめぐつてゐる。

ロマン・ロランと尾崎喜八

なる人類のサンフォニーを作るために働きませう！

私はあなたと握手します。

ロマン・ロラン

一九二二年六月廿四日土曜日
ヴィルヌーヴ（スキス）ヴィラ オルガにて
尾崎喜八君

あなたの熱誠なお手紙と、あなたの著書とを落手しました。私は心から感謝してゐます。私はあなたの詩を読むことの出来ないのを悲しみます。あなたの肖像は私にとつて未知のものではありません。それは私の友人リヒヤルト・シユトラウスの若い時の像を持つてゐます。注意すべき事には、あの彫刻も亦私はロダンの芸術に近いものと思はれるのです。

私は自分の作品が、日本であなたのやうな読者と友人とを見出した事を幸福に思ひます。其等の作品が、世界いたる処で追害せられた人類の自由を、世界いたる処で擁護することに役立つやうに、そして其事が、極東なるあなたの民族と、極西なる私の民族との間の、精神的友愛の聯鎖となるやうに！ 私に就いて云へば、私の精神は久しい以前から国境なるものを考へませんでした。吾等の箇性を伴ることなく、むしろ其れを励ましながら、偉大

日本でペルリオが愛せられてゐると云ふ事は、私の興味を惹き又私を悦ばせました。フランスでは彼の天才に就いて、たえず論争してゐます。——そして大多数のフランス人は「戦乱を超越して」の著者を憎んでゐます。——彼等の憎惡の対象であるものを読みもしないでゞす。

これは自然の理法です。人間は、彼等より進んでゐる人々を許さないものです。たしかに彼等は、言葉を発見した天才者を死に就け、又火を奪つた天才者を殺しました。——しかし此の勝利は、彼が支払つた犠牲に相当するだけの価値あるものです。

「私が住んでゐるヴィルヌーヴはレマン湖の湖畔で、ジユネーヴの正反対の地点にあります。私の写真を書留便でお送りします。」

五月廿二日、自分の詩集「空と樹木」に添

へてロマン・ロラン氏に手紙を送つたところ、それから二月目の七月廿六日の美しい朝、同氏最近の写真と一緒に、別稿のやうな鼓舞的な返事がスキスから届いた。私は昂奮した。トイから初めての懇切な手紙を受けとつた時のロラン氏自身の感激が、今度は私のもであつた。仕事も読書も手に著かず、悲壮な感に醉ひつゝけて、私は野をさまよつたり室にとぢこもつたりしながら、たえず唯一の何物かを瞑想しつづけた。生れて初めての経験であった。やがて最後に、或る確かな光明に照らされて、一切がはつきりと私の眼前に現れた。私は現在の自分の道の正しい事を確信した。実に「おのれの箇性を伴うことなく、寧ろそれを励ましながら、偉大なる人類のシンフォニーを作る事業に向つて働く」より外に道のない事を腹の底から感じた。それと同時に、私のやうな名もない極東の一青年にさへ、かくまで懇切熱烈な手紙を即座に送り得るほど、常に求める心に対し成されてゐる友情の準備と、たとへ如何に幼稚であつても一の正しい魂の声を決して軽んじない其の真摯な態度とに最も強く感動した。フランスからの此の大いなる鼓舞の言葉は私に限りない勇気を与へ、精神の自由を感じさせた。私の将来の仕事を遙かに眺めてゐるロマン・ロラン氏の厳格な眼の輝きを感じると同時に、その太陽によつて事業の第一歩を祝福された気がした。私は心の奥底からの誓言のために身震ひした。私は本当の意味で洗礼を受けた氣

がした。今後許された生命を人類に向つて捧げる事の如何に悦ばしいかを思つた。私の精神の船の航路はすでにきまつてゐた。そしてその航路の正しい事は現代の最も信頼し得る一人の口から直接に告げられた。私は奮ひ立つ！ 私の仕事は最早や私一人の満足のためのものでは無いであらう。それは万人の心を悦ばせ、真善美による普遍の幸福を人々の胸に伝へるものとなるであらう。今後、私の芸術は何等特殊な感覚、独自の思想によつて其の存在を主張することはないであらう。それは益々普遍的な性質を現すであらう。今までもさうであった様に、今後愈々私の芸術は理想を高調するであらう。多様にして皮相な時流的意見から懸絶して、私は最も堅固な、そして最も正当な道を取るであらう。たゞへ同時代者の冷遇が砂漠の寂寥を以て私に臨まふとも、私の額は常に敢然と不滅の理想を唯一の光として其れに向ふであらう！ そして若しも私の仕事にして、人類友愛の連鎖の一の環となる事があるとしたならば、私は今日直接自分に向つて発せられたこの最初の激励の言葉を、永久に感謝し記念するであらう！

私の第一詩集「空と樹木」は、今日となつては殆んど自信を持てない程の物であるにも拘らず、未知多数の人々から厚意の手紙を送られてゐる。日本の各地から、朝鮮からそして一通は支那から來た。私は恥かしく思つてゐる。其等の熱烈な厚意の表白に報いるためには、今後益々良くなるより仕方がない。益々此の芸術の大道を築き上げてゆくより道が

ない。恐らく特色らしい際立つた特色がなく、実に単純至極な芸術を提げて、しかも人々の胸に触れる事は、苦しい。大道を作る事は苦しい。しかも此の苦しい仕事こそ私に課せられた一生の事業である。それでも其の苦しさは、今日こんな幼稚な一地点に立つてゐる私の芸術に向つてさへ注がれた幾十の友情によつて慰められるのである。

そして厚意と激励との言葉は、ひとり未知の人々からばかりでなく、「白樺」時代の古くからの友達、又此頃知り合つた少數の詩壇の人々からも送られた。私は心から感謝してゐる。私は日として幸福でない時はない。少數の友達は皆私を愛して呉れる。私は其れを恐らく自分の未来を期待する友情からだと思つてゐる。かくて私は此の幸福のために飽くまで慎み、そして益々働くと云ふ決意を強めるのである。あゝ友達！ 友達の心を思ふと重い責任に压されながらも晴れやかな愉悦を感じるのだ！

「白樺」八月号の千家君の「美しい田園」や

「詩聖」八月号の水野君の詩には本当に感心した。「詩聖」の詩が段々充実し飛躍して来るのも嬉しい。一体此頃自分達の同族が、はなればなれになつてゐながら懸命な努力をしてゐるのは何と云ふ愉快さだらう。今に日本の芸術に本当のルネサンスの来る事を私は確信してゐる。もう一と息だ。多分私などは連れはせではあるが、当來の復興期を飾る一員にはどうしても成らざるはゐられない。働くより仕方がない。迷はず、怠けず、失望せず、

強く、正しく、しっかりと、確信の道を歩むより仕方がない。あゝ、斯くして生きる事は何と云ふ希望であり悦びであるだらう！ 心の底から、善き人皆の健康を祈らずにはゐられない。

ロマン・ロランの友等に(上)

(『詩聖』大正十一年九月号)

日本のある都市や田舎に散在して、内に高邁なまじみを持ち、朗かな心の青春を常に失はず、眼前目睫のかりそめ事をがらくたとして見て過ごし、各自の固有な運命の下で黙々としてその天職にいそしみ、しかも常

にたましひに語りかけて来る偉大な思想や芸術を日常内面の糧として食つてゐる見知らぬ人々よ、友等よ！私は今日本紙を通じて、私の深い友愛の情緒から、愛する諸君に、我國のあらゆる土地に散らばつてゐる友等に、今、一つの消息を語りたい。

その人の名がその思想と芸術と共に既に諸君にとつて親しいものとなつてゐるロマン・ロラン。その世界友愛の信条と連れだつて、その名が春の大空に漂ひ流れる「森の鐘の音」のやうに懐しく響くロマン・ロラン。彼ロマン・ロランは今年一月二十九日の満六十歳の誕生日に當つて、精神的日本、芸術的日本に向つて、遙かにそのメッセージを寄せた。「わが日本の友等よ。

数年以來、余は諸君の熱烈な心を知る事を学んだ。正義に対する共通の飛躍、真理に対する共通の愛、美に対する共通の感覚、英雄的な理想主義が諸君を近づけた。余は知つた、

國家の境界が失はれたのを。すべての国家に於て、高邁な魂は皆同族である。余は諸君の中に兄弟を見る、そして手を差し出す。東方の精神的財宝と西方のそれを俱に包含しやう。何一つ失はれぬやうに！。諸君の祖先が残した富をそのまま護り給へ。諸君の芸術及び思想のすばらしい資質！。其等は我等西方人のものである。吾が古き欧羅巴の複雑な魂の財宝が諸君のものであるやうに。其等のものを調和させやう！（後略）と。

精神的亜細亞と精神的欧羅巴とを相合して、其處から世界友愛の理想の実現を鍛へ出さう

といふ信念は既ははやくから此のロマン・ロランのうちに育まれてゐた。そして今日世界のあらゆる言葉に訳されて、心への感動の道を旅してゐるあの「ガンディ論」を書いて以来、此の信念は頓に確乎として彼のうちに立ち上がつた。彼の声は籠をはなれた小鳥のやうに、その晴やかな友愛の歌を運んで世界の隅々にまで飛んで行つた。それを今一度籠の中にとぢこめる事は出来ない。たゞへ何者かの暴力の手がそれを捕へ、それを締殺さうとも、心から心へと手渡しされ広まつて行つた「世界の兄弟よ、相抱かう！」の此の歌は、これを悉く滅ぼしつゝさうとしても無駄である！人々は見た。人々は聴いた。一つの衝動は既にその人々の中に生れた。最早その眼に眼がくしをし、その耳に指を差込んだとて遅すぎる！。

私は此の彼の六十歳の誕辰をことほいだ、瑞西の小村での物静かな祝祭と他の二三の事とを諸君に告げたい。けだし其は私すべき消息ではないばかりか、その人みづから的心情と筆とを以て親しき公開の書翰を我国に送つて來た以上、既知と未知とも問はず、ロマン・ロランの友は日本にこそ無数であり、斯かる多くの友等に恐らくは彼等の知らんと欲してあるであらう彼の消息を伝へるのは、私の義務であると想ふからである。

（中）

諸君。諸君は既に東京での彼の還暦を祝つた祝祭——その作品の上演と多数思想家芸術

家の講演、朗讀等の形に於ける祝祭に就て知つて居られる。また其日を記念として、「ロマン・ロランの友の会」といふ自由な一団体が成立したことも知つて居られる。しかし瑞西で、その瑞西のジュネーヴ湖の東端の小村で、一九二六年一月二十九日に行はれた祝祭に就ては殆ど三四の人を除くほか知られてはゐないであらう。

彼の還暦を記念する企ては、既に昨年の秋ごろから其の少數の友によつて仏蘭西^{フランス}と瑞西とで考へられた。仏蘭西ではルネ・アルコス、レオン・バザルジエット、アルベール・クレミュウ等が主宰してゐる雑誌「ウーロップ」を、彼に関する記事と彼自身の未発表の作品とで全部埋めて特別号とし、これを彼に献呈しようとした。又瑞西ではチユーリッヒの出版者であり彼の懇な友であるエミール・ロニガアが、ジョルヂュ・デュアメル、マキシム・ゴルキー、シユテフアン・ツヴァイクの三人の名で、世界各国の彼の友に懇篤な寄稿の依頼状を発し、そこに集まつた友情と感謝との無数の言葉を一冊の書物 *Liber Amicorum Romain Rolland*（ロマン・ロランの友の本）と名づけ、それを彼に献呈しようとした。

この二つの美しい企ては実現された。「ウーロップ」は精銳の論文を集め、（バルビュッス、ルナチヤルスキイ等をさへ！）友の本は、そこに満載された眞実の友情と感謝との告白（百二十六人の寄稿者）によつて愛のまどるとなつた。この友の本には六人の日本人が書いている。吉村せい子夫人、故平澤哲^{オノザケ}氏、

倉田百三君、片山敏彦君、高田博厚君、そして私。ロランは此友の本を読んで私の友の一人に、彼の深い感動を伝へて来た。

「君等の愛の証を読んで感動しまし」。発表された中でも殊に君達日本の声が最も心を打つものであり、(合衆国からの声と共に)、それにつれて皆の者が一致した意見を持つてゐます。

……これは最も直接な、最も偽らない現れです。ペートーフエンが云つたやうに心から心への。——私の心は其事で温情に満ちた感謝にふるへました。」そして彼は吾々日本の手とアメリカの手とを結び合せやうとして云つてゐる。「アメリカの此の理想主義者の少数の選良は、君等のやうに熱烈で、純潔で——君等のやうに孤独です。——さうして彼等の歓迎の靈を勇ましく護つてゐます……」

(友の本には世界の文学者の外に、アインシュタイン、ナンセン、オーギュスト・フォルル、ニコライのやうな科学者達が美しい温かい恭敬の心を披瀝してゐる。)

(下)

次は瑞西での祝祭である。

一月二十八日—誕生日の前日—前記のエミール・ローニガアが彼の妻君と一緒に、ラインフエルゲンの町からロランのヴィルヌウヴの住居へ先づ到着した。この熱情的な友は、しかも彼の心からの祝意として、瑞西で第一流の絃楽四部合奏団を伴つて來たのであつた!それは夕暮に近かつた。そして直ぐに、

午後の七時に、ロランの家の食堂でその音楽家達は演奏を始めた。ペートーフエンのセレナードとモーツアルトの長調のカルテツトとを。其夜は仏蘭西から二三の友が來た。その中には作家ジャン・リシャール・ブロックも居た。ロランの家の御馳走が出た。冷肉が出、サラドが出、シャンパンが注がれた。ロランの嚴父はその九十歳と云ふ高齢にも拘らず列席して、その若さと快活さとで人々を驚嘆させた。

誕生日の当日、二十九日になると、朝の十時半頃ローニガア夫妻がホテルからロランを迎へに來た。その時ロランは特別に印刷した「友の本」を数冊贈られた。ホテルへ往くと又奏樂があつた。ロラン自身の所望によつてペートーフエンの二つのカルテツト、即ち作品第五十九番第一の長ヘ調と、作品第百三十二番の嬰イ調とが。ロランの令嬢は私達への詳細な知らせの手紙の中で、「此の演奏は実際に完全な、實に敬虔な、實に偉大な單純さに満ちたものでした!」と云つてゐる。祝賀の客にはトルストイの最後の秘書で「トルstoiイ伝」の著者である老ビルコフ、その著書の多数の英訳で広く知られてゐる詩人心理学者シャルル・ボーデワン、それから昨日の人々一同食、晚餐。ロランの家での楽しい夜更かし。

家中では到るところ贈物の花束で一杯であつた。それは瑞西、仏蘭西、独逸の各地から贈られたものである。熱烈 祝意をこめた世界各国からの電報や手紙が山をなしてゐた。そして最も彼等を感動させたのは、「平和と自由との婦人聯盟」の独逸支部が、ロランの誕生日の記念として、彼等の仏蘭西の姉妹達に、荒れ果てた仏蘭西の地面に並木を植る為めの巨額の金を贈ると云つて來た事であつた。それは物々しくない、お祭騒ぎでない、静かな、温かな、愛に満ちた宴であつた。祭が果てた後花々と、祝賀の手紙と、「友の本」とに囲まれて、老たるロマン・ロランがどんな深い感慨に落ちこんだかは私達のよく察するところである。

「かうして私の生涯の二人の守護神が、トルストイとペートーフエンとが、此の小さなお祭に加はつてくれました」とロマン・ロランは手紙の中で云つてゐる。

見知らぬ友等よ。私は此の小さいお祭の事を諸君に伝へるのに私の最も純粹な、愛の心情を以てした。私は、私の此の熱狂を噛んであらう人達のある事を知つてゐる。既に、彼に捧げられた「ウーロップ」の特別号で、あの熱烈なルネ・アルコスがその勇敢な槍の穂先で突き貫ぬいたやうに「全世界はロマン・ロランの理想を嘲笑する!」(アンリ・マッシの言葉)と云ふ悪罵もあるのである。私は此種の嘲笑が自分に向けられるかも知れない事を、充分予想しながらも、しかも尚此國には、彼ロマン・ロランによつて高唱されてゐるやうな友愛の現想主義に善き生活の支柱と信仰とを持つてゐる人々のある事を信じて、敢て此の愛のまどるを知らせた。

沈黙してゐる事が、時に勇氣を欠いてゐる事になる場合もある。ロマン・ロランに就て

その理想を伝へる事は、現実主義と理想主義との交流してゐる今日の日本ではそれさへ実に一つの勇気を必要とする事である。しかし私は機会あることに私の声を発する。私は臆さない。なぜならば、どんな小さな火花としても其処に高潔な理想主義がある以上、その火花は私のうちなる火花を勇気づけ、鼓舞してくれるからである。愛する日本は彼等ある以上生るに価する！

（『都新聞』大正十五年四月七、八、九日／
原文は旧字体、タルビ付）

或る会合（上）

旧「大街道」社の延長、「ロマン・ロランの友の会」といふ名で、私達同じ精神の一群が、毎月一回の会合を初めてからこれで二度目になる。十月十六日土曜日の午後、中央線荻窪停車場に近い杉並町天沼の一会员の家で残らずの仲間が一緒になつた。集まる者総て八人。此月の幹事上田秋夫、片山敏彦、吉田泰司、高田博厚、今井武夫、高村光太郎、尾崎喜八、それから新に加はつた宮本正清。雨が降つてゐた。郊外の秋景色はしつとりと霧に濡れてゐた。神奈川から、本郷駒込から、或は一里をへだてた隣村から、何かときめくやうな思を心に抱いて、秋雨に唐傘や洋傘を傾けて皆が集まつた。仲間の者の元気な顔を眼に浮べながら。又会合そのものゝ楽しい創意的な空氣を予め感じながら。その共感

の喜を一と月目の事に思ひながら。

床の間には最近のロマン・ロランの大きな肖像が額に入れて吊るしてある。今年六十歳の誕生日の記念にうつした写真である。その下に蓄音機。ペートオフエンの百三十二番のクオルテットのレコード一組。季節の花を活きた花瓶が一つ。それつきり。清楚な八畳の座敷には八枚の座布団がきちんと並んで、手焙りがその間を点綴してゐる。秩序と親しさ。

硝子戸の外では庭のコスモスが雨に乱れて、銀杏がすでに黄いろくなつてゐる。陸稻畠に群て来る雀の声、百舌鳥の高音。今点いた電灯の柔かい光。

皆が集まつて来て順々に座に就く。めいめいが色々の機会には会つてゐても、かうして一緒になるのは一ヶ月ぶりである。此頃会はなかつた者同志の親しい会話。仕事のこと、旅のこと。そして今日の空氣はおのづと出来て來た。

併しこれは飽くまでロマン・ロランの友の会、芸術の大道を闊歩し、精神の自由の風を運ばうとするともがらの会である。先づ吾吾の共通の「神」を見なければならない。比較を絶したベートオフエンを聴かなければならぬ。Relique Curiosa. 生命の源を汲まなければならぬ。

暁の星々が一齊に歌ふやうな夜明けの大西洋の潮騒のやうな、宇宙の深淵がこつねんとして開けるやうな、ペートオフエンの百卅二番が身をもたげた！歌ひ始めた！

酔の深さを、高い酩酊を、魂の恍惚を、茲に述べる事はむづかしい。それは何時だつてむづかしい。言葉は死んで、眼を覚ますのは聴く者の魂である。魂を語るのは一つの冒險である。たゞ聴かなくてはならない。

そして私達は聴いた。酔つた。洗ひ出されて素裸になつた私達の魂。その魂は浮塵を払つて、最も根本的なものに直接する。これさへ有れば何でも出来ると云ふ信仰が生れる。けちな「事情」や低い人倫を絶した境である。

（下）

ペートオフエンに息を吹き掛けられて、一座の空氣は緊張して來た。其時上田が読み始めたロマン・ロランの手紙は益々会合の空氣を濃密にした。吾々に語りかけて來る此の瑞西からの声は、めいめいの心を自由にさせながら皆の信仰を鞭撻した。やゝともすれば現代日本のがらくたから遠ざかつて、自己の良心や理性をひたすら護る為に吾々が一人の世界に閉ぢこもつて仕舞ひ兼ねない時に、ちやうど此の声は訪れて來るのである。

「そして美しいレマン湖の奥から、皆の中でいちばん純潔な者の声がかう呼びかける。君は眠つてはいけない。さもないと私は君を起しに往くだらう！」と、吾々の仏蘭西の友ルネ・アルコスは彼の近作「他の者」の最後の頁で書いてゐる。

眠つてはいけない！自分一人の甘美な夢想の中ですら！、働く！働きかけよ！「何も無い人間は決して誤りをしてかさない。併

し生きた真理に向つて格闘し続ける誤りは、死んだ真理よりも一層豊饒であり、一層幸福である」（ロマン・ロラン）

真のロランディストは此れである。新らしい神聖家族は戦ひを辞さない！

たとへ此の二人の太陽の前では余りに小さい自分達の火を恥しく思ひながらも、此の小さい火が、あの太陽から受けつがれた物だと云ふことを信じてゐる吾々は、又此の小さな火花の中に自分達の未来が約束されてゐると信じてゐる吾々は、めいめい懐から此頃の仕事を出して読み合つた。詩があつた。若い者達の勇気を鼓舞するやうな、一彫刻家の青年時代の思ひ出があつた。感想があつた。戯曲があつた。作者その人の声で聽く此れ等の出来たての作品には、活字になると味はゝれない心の顛へと清新な感じとがあつた。翻訳ではヘルマン・ヘッセの詩が二篇読まれた。

それから吾々にとつては幾らか堂々たる皿の数々が並び、麦酒ビールがそゝがれた。人はくつろいで、話は水のやうに拡がつた。併し此の友情の歓会をめぐつて、何時も確な理性と高貴な智的空氣とがあつて、其等のものが極めて微妙に話題を引きしめ、活氣づけ、高め、一切の浅薄さから其れを護つた。

最後にロマン・ロランの「ジャン・クリストトフ」が読まれた。それは此の会合の終曲フィナーレとし何よりもふさはしかつた。ベートオフエンに初まり、ロマン・ロランに終つた吾々の第二次の会合は斯くして果てた。皆は来月の再会を楽しみにして外へ出た。雨が上がつて十月

の夜空を雲が走つてゐた。十日の月が時々その雲間を洩れた。人は全く一新された心と身体とを運んで帰途についた。

かうして此處に一つの集まりがある。友情アミチニと精神エスプルとで編まれた俗門の教団がある。私はかう云ふ教団が他にも編まれる事をのぞむ。それが生命に属するものである限り、其等はやがて呼び合つて、より大なる一の精神体となるであらう。

（『都新聞』大正十五年十月二十六、二十七日／原文は旧字体、総ルビ付）

大陸をこえて

欧羅巴や西比利亜の広大な空間をこえて、外国の友からの消息が失はれもせず、或日私の手にとゞく。若い、又は老人の、どんな郵便夫の手から手へわたり、欧亞にちらばるどんな都會や田園や、荒涼とした自然の中をはこばれて来るのかは知らないが、文明のもつとも偉大な事業のひとつである此の國際郵便の使命に対し、私としては時々深い、宗教的ときへ云へる、感慨に打たれずにはゐられない。

それは瑞西レマンの湖畔から、あの永遠の冬の氷雪をきざむやうな父らしい厳しい言葉と、アルブの春をそよ吹く風のやうな優しい慰撫の言葉とを運んでやつて来る。鳥の羽根か楽譜を想はせる文字で宛名を書いて、いくらか老人の氣短からしく、エルヴェチアの切

手を無造作に貼りつけた何時もかはらぬ水色の封筒。それはロマン・ロランからのである。

彼は私から送つた最近の詩集について云ふ。

「君の本を読むことの出来ないのは残念だが、それでも翻訳してある二篇の詩をとほして、露はにされた君の魂の状況を見ることは出来た。ひとつは優雅であつて淋しい、もうひとつのは、（本の中へ入れる事が出来なかつたらしいが）毅然とした、胸を刺すやうな悲痛さを持つてゐる……」

又今日の仏蘭西及び欧羅巴の形勢についてロランは云ふ。

「吾々は大いなるカタストローフの前夜に、国民的及び社会的戦争の前夜にある。不充分に組織され武装された諸々の最善の力が圧しつぶされてゐるといふ事は恐ろしい事だ。これはまるで聖バルテルミーの夜の光景だ。世界全体がひとつの擾乱時代にむかつて進んで行く。それは比較的短かくはあらうが、（三年乃至四年）、非常に兇暴な一時期を現出すだらう。それは書き記された一つの法則に似てる。天体では無く、破壊と更新の内部的な諸力に押されて盲目な前進をする人類の避けがたい宿命の中に書き記された法則である。法則は厳しい。しかし其れが解れば颶風の中でも落着いてゐられる。颶風そのものも法則の奴隸だからだ。彼は其の草案を遂行する。そして自己の仕事を果たしてしまへば立去るだらう。其の先を見なければならないから一切に拘らず、すべての道を通つて、革命と反動との相反する全武力の格闘を経て、革

人類の一一致協同は成り立つだらう。金敷の上の鐵槌無くて人は何物をも鍛へる事は出来ない。鍛冶屋がその鐵槌を上げる……」

ロランからの手紙。それはどんな書物よりも強力で私の精神を叩き起し、彼の烈しい聖火を私の薪木に燃え移さずには置かない。

シャルル・ヴィルドランクからはもつと日

常的な、巴里＝イール・ド・フランス的な声が響いて来る。彼もまた私の日本語の詩集は読みないが、山嶽と自然とから靈感をうけた詩の本だといふ事は「ちやんと解つてゐる」と独りぎめして私を微笑させる。

彼は色々な自作の上演された事を知らせる。

シェイクスピアの「真夏の夜の夢」を改篇して、それを舞台にのぼせた事も云つて寄越す。詩も散文も書いてあるが、今は映画で忙しいと云ふ。「商船テナシティ」が映画化された。シナリオも対話も自分で書いた。必要上原作をいくらか変へた。さうして此の新しいメティエを習得するため、「テナシティ」の製作に九月からずっと附き切りだつたと云ふ。

彼が巴里にある私達の友高田博厚に対して払つてゐる色々の心遣ひは、こまごまと書かれた手紙の中で、まことに甥に對する叔父さんのそれのやうに愛情に顛へてゐる。

それは彼の小さい美しい劇「巡礼」や、詩集「愛の書」そのまゝである。彼は高田の窮状を伝へる。しかしこれを伝へるのは「僕が友情のイニシアチヴをとる意味であつて決して高田の暗示によるものではない。なぜならば

彼はその逆境にあつても尚慎み深く且つ勇氣ある男だから」と附け足す事を忘れてはゐない。

彼は又ジユール・ロマンの小説「善意の人々」を読む事を私にすゝめて「感動的であると同時に稀なる偉大さを持つた作品」だと云つてゐる。

ジョルジュ・デュアルメールはその樹幹のやうな肉太の文字を、小さい書簡箋に懶々と書き流す。彼は「モスコウ紀行」の翻訳について、翻訳権の事を気にしなくともいふと云ふ。そして尚もする氣があるならば、その北米合衆国への紀行である「未来生活の諸場景」を訳さないかと奨める。そして私自身の制作の事を訊きながら、手紙を寄越す時には其事も知られるやうにと親切にも云つて呉れる。

彼はまた身辺の事も簡単のうちに要領よく聽かせる。

「私は仕事に圧し潰されてゐる。陽気は暑く、重苦ししく、雷が威嚇する。それでも庭は或る花の盛りで、すつかり碧くなつてゐる。その見本を同封する庭には日本の花もかなり有る。しかし此處では、君達が日本で見ると同じ位美しいのが一輪でも咲けば、それで満足しなければならない……」

マルティネ、デュルタン、アルコス、プロ

ツク、ジュー、ジヤン・ジオノ等からの、又ヘルマン・ヘッセ、フランツ・ウェルフェル等からの貴重な数多い手紙を割愛して、最後にたゞ一通の今は亡いレオン・バザルジェットの形見の手紙。

バザルジェットは人も知る「ホキットマン伝」二巻「草の葉」の翻訳二巻「ヘンリイ・トロオ伝」一巻其他の著者である。そして彼の裏には、同様にいつもホキットマン＝トロ

オ的なものが其の精神と仕事との原動力になつてゐた。私は夙くから斯うした彼に私淑してゐた。しかし来朝したヴィルドランクを通じて初めて彼に手紙を書くまで、十年余り吾は互ひに知り合ふところが無かつた。そして初めて彼からの手紙に接した一年後、私は彼が五十六歳を一期として此世を去つたといふ悲しい通知を受取らねばならなかつた。

バザルジェットは私への最初にして最後の手紙を Peu importe que と云ふ特徴のある冒頭句で書き出している。

「君が署名して送つて呉れた写真を私に届けて呉れる前に、デュルタンが其れを永く手元に置いたのであつても構はない。又病氣であつた私自身、君に御札を云ふのが遅れたとしても構はない。なぜならば其の肖像の本体たる空間の路を通して直接私に達したかのやうに新鮮なのだから。私は非常な喜びを以て其れを眺め、君の事を考へ、そして御互の親しいヴィルドランクが君に就いて話して呉れた事を想ひ出してゐた……」

懐しいバザルジェットの死後、私は彼の未亡人から、彼が二十五歳の時初めて出した論文集「新精神」と云ふ厚い本を贈られた。夫の歿後書斎を整理してゐる、とすでに絶版になつて久しい此の書物が四五冊、別に新聞紙に包まれて仕舞つてあつた。それを故人の

形見として私に一冊贈つてくれたのである。

これを書きながら、バザルジェットの肖像と手紙と書物とを前にして、私は彼に価するやうな仕事を残さなくてはならないと心から思つてゐる。

そして此處に挙げた此等の手紙、又それを挙げた私の気持、それが決して私の自負や自愛で無いといふ事を、大方の諸君の解つて呉れられるだらう事は私の信じて疑はないところである。

〔書窓〕昭和十年六月号／原文・旧字体。なおこの記事には「尾崎氏蔵」としてロラン、デュアル、ヴィルドラックの「手簡」の写真が二頁にわたり掲載されている)

偉大なる師への私の感謝

(この二十年間、自分にとつて芸術及び思想

の兩方面にわたる偉大な師父であり、其名をおもふ度毎に今もなほ肉親に対する同様の、或はそれ以上の愛を、眞に「子たるの愛」を感じずにはゐられないロマン・ロラン、その

ロランの七十歳をことほぐ此の集ひに懇ろにも招かれて、今日私は無上の幸福を味ふと同時に、相ついで湧き起るさまざまの感慨に身をゆだねざるを得ない。

彼に対する恭敬と感謝との筆を取らうしながら、然し私は玆に当然一つの不自由な制約をうける。即ち此雑誌本来の使命に応ずるために、主として音楽史家乃至音楽批評家と

してのロランから余り離れる事無しに書かなければならぬ事で、之こそ元来遲鈍な私の筆がよいよいためらう所以である。そして此等の取入れ豊かな仕事、此等の美しかるべき任務に対しても、私などよりも遙かに有能・適任の士が多く、芸術の此分野に深く通曉してゐる専門の人士が決して尠くない時に、しかも自分如き門外漢にして尚且つ幾行かのオマージュを綴ることを許されるとすれば、私として採るべき最も自然な態度は、「人は恐らく斯々の事柄について論ずる事を自分に期待してゐるであらう」といふ仮設の下に筆を取り上げる事ではなくして、「自分は彼から如何に音楽を教えられ、其の彼をどう考へてゐるか」といふ事を、卒直に、且つ素朴に語るの外は無いと思ふ)

1 彼は私への私信で屢々「我子よ」(mon fils)と呼びかけてゐる。

ロマン・ロランは私にとつては音楽への愛の最初の目覚まし手、心情の奥底への其れの啓示者、魂への慰め、喜び、また力としての音楽の顕揚者であつた。

抑もある「ジャン・クリストフ」の最後の巻の冒頭をなす頌歌以上に、或は訴以上に、音楽の本質と彼女に対する人間の遙かな思慕の心とを、かくも高貴に、深く、感動的に道破し得た文字があるだらうか。

「生は過ぎ行く。肉体と靈魂とは流のやうに流れ行く。歳月は老いたる樹木の肉のうち記される。形ある世界はすべて滅びては又

蘇る。おんみばかりは過ぎ去る事がない、不死の音楽よ。おんみは内面の海である。おんみは深遠な魂である。澄みわたつたおんみの眸に人生の苦渋の顔は映らない。おんみばかり遠く、雲らの群のやうに日々の列は飛ぶ。然え、こほり、熱しつゝ、不安に逐はれて、彼等には絶えて停まる暇も無い。おんみばかりは過ぎ去らない。おんみは世界の外にある。おんみはおんみ自身に於て一つの世界である。おんみはおんみの太陽を持ち、おんみの法則を持ち、おんみの干満両様の潮を持つ……」「私の痛める魂を揺すつてくれた音楽よ、それを私に確乎たるもの、平和なもの、悦ばしきもの、——我が愛、我が宝、——として返してくれた音楽よ、私はおんみの汚れなき唇に接吻する、おんみの蜜のやうな髪の毛の中に我顔をうづめる、おんみの手の柔かな掌の上に燃ゆる我眼瞼を置く。われわれは黙してゐる、われわれの眼は閉ざされてゐる、しかも私はおんみの眼の言ひ難い光を見る、物言はぬおんみの口の微笑を飲む、そしておんみの心臓の上にうづくまり、永遠の生の鼓動に私は聴き入る」

どんなに多くの名も無い優しい魂たちが、貧しくはあるが心情に於ては高貴な人々が、時めく世間に顧みられぬそれぞれのつゝましやかな片隅で、彼等の内心の熱い感謝やあこがれの至上の表現を、宇宙の夕べのきはなし立つて吾々の世界を瞑想する若い天使の歌のやうな、此の清明な章句のうちに見出した事だらう！

そして之こそ私にとつても亦無上の啓示であつた。私は青春の道の門出にして初めて此のやうな世界のある事を知り、此處に称へられたやうな音楽こそまことの音楽であり、人が己れの心を与へるべき音楽は斯かる音楽の外には無いと固く信じた。此の信念は、其後自分の個性と運命とに従つて勝手気儘の繁茂を遂げた思想や、教養や、閱歴の紛糾した森の中でも、尚清澄な青空と太陽の光とに愛撫される疎開地として残つてゐる。私があのゴットフリードを、あのシュルツ老教授を、あのアントワネットを、心から優しく招じ入れて、彼等のクリストフを、クリストフ・ロランの音楽を、共に傾聴したいと思ふのは実に此の神聖な小天地に於てである。

或時の手紙でロランは私に斯う書いた、「君は私に歐羅巴の音楽を云ふ。だが日本の音楽については少しも聞かせない。然し君達はそれを持つてゐる筈だ。音楽を持たない民衆といふ者が何処にあるだらう! 君達の音樂に対する誠実であれ!」(Restez-lui fidèles!)

1 一九二五年の私信。

彼は「昔の音樂家」の巻頭論文「一般歴史と音樂」の中でも此重要な問題に一層深く触れてゐる。「文明の民衆にして、彼等の歴史の幾つかの瞬間に於て音樂家で無かつた民衆といふものは無い。音樂に對して最も恵まれる所少いものとして吾々が考へ馴れてゐる民衆にあつてするさうである。例へば英吉利は、一六八八年の革命までは偉大な音樂的民衆であった」

私は告白する、私は恥ぢた。「聞かせない」と

いふ限りに於ては、自國の音樂に對して確か

に誠実ではなかつたから。それは同国人の或人々の當然の非難に代るロラン自身からの優しい非難だつたから。然し私が自分の育つた時代や環境のためにたとひ幾らかは其等に通じてゐたとしても、吾々をあの「ベニトオフェン」で薰陶したロラン、音樂のサムソン「ヘンデル」を書き、あの浩瀚で豊饒な「過去の國への音樂の旅」や、「昔の音樂家」を書いたロラン、最後に音樂家・人間ジャン・クリストフの史詩で吾々青年の魂を引摶つたロランにして、抑も私の解してゐた如き日本音樂に就て何を語る事が出来たであらう。私は所謂拝外者のやうに、外国の奴僕のやうに、誇もなく自國のそれを卑下したのであらうか。否、決して! それにしても私が内心に或る忸怩たるものと、見解に或る正教徒的な狭さとを持つてゐた事は事実である。然し今日よりも尙若く、今日よりも更に一本氣な理想主義者であつた私として、折角伸ばされた此の高邁な「音樂史家」の友情と批判との手に、「能」はおで掛け、我國の文化の中でも自分としては躊躇された街の花の幾輪を、ガイドのやうに厚かましく、馴々しく、差出す氣には到底なれなかつた氣持も或は同感を得るかと思ふ。

今やそれを誰がする? 然しだすに時は遅い。「鳥はいつまでも樹には居ない」Tempi Passati! 少くともロランの鳥はある鬱蒼たる音樂の森を飛び去つた。彼は其の為めの筆を絶つた。今では音樂批評の一篇、音樂史の一論文を書く事すら「支那語で書く事のやうに

不可能である」 彼はアンリ・プリュニエールの懇請に答へる、

「私は自分の全力を要求してゐる主要な課業に一身を捧げなければならぬ……其中へ音樂の為めの席を取る事は到底出来ない。彼女について粗雑な書方をするにしては私は余りに音樂を愛してゐる。何時か一人の生きてるベニトオフェンに出逢ふまでは、私は此の沈黙の誓を破るまい。其時こそは残る生涯を悉く捧げるだらう。然し今吾々は其処には居ない」

1 一九三一年の私信。

2 アンリ・ブリュニエール「ロマン・ロラン」と音樂史」(雑誌「ウーロップ」ロマン・ロラン号)

その「主要な課業」とは何か。恐らく、今日では、自叙伝「内部の旅」の完成と、彼の古くからもう一つの大的なる熱情が新らしい地平の森に飛び移つて其処に燃え上つたところの、Par la Révolution, la Paix. の熾烈な闘争であるだらう。

だが私は現在の私の課業、ロマン・ロランと音樂との問題に帰らなければならぬ。

ロランの「ベニトオフェン」に対する、(私は今日でも尚世界の隅々に亘つて広く読まれ、その道德的感化力を振つて止まないあの水色の表紙を持つた、僅か一五〇頁余りの小冊子の事を云つてゐるのである)その「ベニトオフェン」に対する吾々の青春の日の深い愛著、寧ろ神聖な狂氣じみた信仰は、少くとも其処に到る吾々の動機が純粹であつた事

と、其れが吾々にとつて「無くて叶はぬ唯一一つの物」であつた事とによつて、今も尚悔無く、懷しく回想され、其の聖なる^{スティック}烙痕を魂の樹皮の上に残してゐるのである。然し人間に及ぼす此の道徳的感化は、或は人が余りに過大に受けすぎる道徳的影響は、然し或る人々、殊に他の一方の音樂理論家、歴史家、批評家、及び実技家に属する人々の間からは、往々にして非難や憤りを招いた。それが自由にして精緻であるべき智性の活動を妨げ、鋭敏、柔軟な感覺を麻痺させ、藝術を批判するのに道徳の尺度をもつて臨む不都合な習慣を養ふといふ理由で。そして今日、私としては、昔吾吾が持つてゐたと同様な青年の信仰に対して充分の同感と愛とを感じながら、此説を認めることにも吝ではない。然し一体ロマン・ロラン自身こんな事を知つてゐなかつたであらうか。たとひ彼がその道徳的英雄主義で青年を毒したとしても、同時に彼等に対して一層広い世界の展望を示す事を忘れなかつたのも亦同じ彼である。否、寧ろ彼は何時でもさうであった。彼は二つの魂を持つてゐた。「一つは高い丘陵で、それは風と雲とに撃たれてゐる。もう一つは其¹を見下ろしながら、光を浴びてゐる雪の山頂である。」

1 「ジャン・クリストフ」(新しき日)

「音樂には唯一の形しか無いといふ事はない」とロランは云ふ、「一つの内面的藝術である音樂は、又一つの社會的藝術である事も出来る。彼女は瞑想と悩みとの娘であり得る。しかし又歡喜の、そして軽佻の娘ですらあり

得る……。或人はそれを動く建築と呼んでゐる。或人は又それを詩的心理學と呼んでゐる。或者が其處に全く造型的・樣式的な藝術を見る時に、他の者は純粹に道徳的な表現の藝術を見る。或理論家にとつてはメロディーこそ音楽の精髓であるが、他の理論家にとつては見る。或理論家にとつてはメロディーこそハーモニーこそ其れである。——そして、実際では、それは凡て本当なのである。彼等には皆それぞれ道理がある。歴史は全体を連れ行く。」

1 「昔の音樂家」(一般歴史と音樂)

吾々の叡智の成熟が、西欧の人間や今日の日本の青年の其れに比較して、甚だ晚かつたかどうかは知らないが、

併しこの荒々しい水のすさびに根ざして、七色の虹の常なき姿が、まあ、美しく空に横はつてゐること。はつきりとしてゐるかと思へば、すぐ又空に散つて、匂ある涼しいそよぎをあたりに漲らせてゐる。

此虹が人間の努力の影だ。

あれを見て考へたら、前よりはよく分るだらう。

人生は彩られた影の上有る。

(森鷗外訳)

の音樂家」が、其の真に高い価値と豊富な意味とを悟らせるやうになつた。彼がモーツアルトに就いて書いたやうに、此の山頂の静謐な一角から遠く英雄等と神々との格闘する平野を見下ろし、潮のとどろく廣大な海を眺める事はよかつた。其處は「展望が自由に利いて、心が高尚になつた」。彼自身の選択としてはベルリオーズとビゼエとの仏蘭西を、英雄的行為の、理性の酩酊の、嘲笑の、光への熱情の仏蘭西を採るロランが、又一方ではドビュッシーの仏蘭西を、全く内面的な、黄昏の微光に溺れ、沈黙に閉ざされた仏蘭西を容れてゐるのも、一つの全体としての民衆の天才を此の二つの仏蘭西の均衡のうちに見るからである。斯うして初めて私は、私自身の傾向や選択をよく知つてゐる筈のロランが、或時の手紙の中で仏蘭西のリイドに就て教へてくれた真意を了解する事が出来る。其の興味ある私信を見よう——

「……然し若しも君が美しい仏蘭西のリイドを求めるならば、私はガブリエル・フォーレの(あの仏蘭西のシユーマンの)、デュパルクの、そしてクロード・ドビュッシーのリイドを知らせなければならぬ。(ドビュッシーのリードは、非常に洗練されたもので、又仏蘭西語の話法と詩的アクサンとの完全な、否む事の出来ない代表的作品である。其中でもピエール・ルイスの小さい詩による「三つのビリテイスの歌」は、貴重な宝石のやうな、極めて珍奇な脆い傑作である)。私は君がヴァルレイヌの詩によつたフォーレのリイドを

最も好きになるだらうと信じる」

一九二五年の私信。此一節の直ぐ前で、ロ

ランは「エゴー・ウォルフの歌の仏蘭西訳に就いての私の質問に答へて、彼の仮訳の歌集

には最も特色的な欠けた作品が選ばれてゐる、其

上ウォルフは、その作曲に際して、翻訳され

ると其香氣の全く消えてしまふやうな見事な

独逸の詩を選ぶのを常としたと云つてゐる。

然し、前にも云つたやうに、今やロマン・

ロランは彼の愛する音楽の森を去つた。曾て

万人に対して一人を守つたロランは、今日、

「自分の哀に己が組合（Gemeinde）を持たない

芸術家は哀れるかな！」と云ふ。バッハ

が其名に於て偉大な合唱や、受難曲や、カン

ターダを書いた神は、組合の神であつたと云

ふ。その天才が今日流行となつてゐるモーツ

アルトは、彼の時代及び吾々の時代に適応す

る術をよく知つてゐたのだと云ふ。すべての

偉大な芸術の中には、万人に対して其の餓を

満たさしめるに足る物がある。今日の万人、

明日の万人に対する。然し己が時代の先頭を

進む天才は、其時代との接触を決して失ひは

しないとロマン・ロランは云つてゐる。

1 「革命をとほつて平和へ」の中、「今日の社会に於ける作家の役割」（一九三五年三月執筆）から。

偉大な芸術家にあつてさて、理性よりも情熱の方が屢々力強く語る場合のある事を証明する此等の言葉を読みながら、私はやはり彼の衷なる成層圈と対流圈との週期的な軋轢の意味を玆に見る。そしてこれこそロマン・ロランの生命の流そのものであり、又彼こそ此

間の消息に最もよく通曉してゐる者のやうに私は理解して來た。ロランは之より先「スピノザの電光」——一九三一年発表——で斯う書いた。

「私は常に並行して二つの生を生きて來た。即ち、一つは世襲の諸要素の結合が、空間の一箇所、時間の一時期に於て私に裝はしめた

人格の生であり、他の一つは、実体其物であつて同時に全生命の息吹きであるところの、

顔も無く、名も無く、場所も無く、世紀も無い実在の生である」そして彼は今こそ此の二つの生の一一致した状態、普遍的な生に到達したと。

とは云へ果して誰が知らう！ 宇宙理法の厳然たる秩序を成壊の跡に照らして見せる歴史のほかに、又海洋、山嶺、平野生成の幾輪廻を、その惨憺たる鏤刻の痕に示す永遠の時の流のほかに、誰が眞の普遍的な生を知るだらう。寧ろそれだからこそ日々の苦闘が、吾々の創造への熱狂の生に価するのではなからうか。

現世紀を射るロマン・ロランの天才の光芒、それは彼の衷なる二個の天体の接触から迸發する。それが一層燦然たる一つの光輝全体として未来の人間世界に届くためには、抑も幾十光年、幾百光年が必要とされるか誰も知らない。それでも拘らず「吾々の個性の何物をも伴る事無しに、寧ろ其等を激させながら、大いなる人類の交響曲を作るために働く」事を私達に説いたのは實にロラン自身であつた。そこでこそ彼はある不朽の序文を持つ「ベニオフエン」を書き、あの不遇の天才「ベル

リオーズ」を書く事が出来た筈である。又それでこそ彼はテレマンを、ハッセを、マンハイムの交響曲作者等を、正当にも、時の忘却の底から発掘する事が出来た筈である。

（一九三六年八月）

1 一九二二年の私信。

（『音樂研究』昭和十一年十月号／ロラン記念号）

（附記）昭和十一年にロマン・ロランは七〇歳になつた。それを記念して、「セルバン」は、前二者が主にヨーロッパでの反響を特集や報告を編んでいる。中でも「音樂研究」は、前二者が主にヨーロッパでの反響を紹介したのに対し、マルセル・ロベールの「ロマン・ロランと音樂」を挿み、片山敏彦、園部三郎、熊沢復六、そして本文の尾崎等の寄稿で特集を組んでいる。これは当時の我国での数少ない発言になつてゐる。尚、パリから高田博厚の「ロマン・ロラン」は本号に間に合わず、次号（昭和十二年一月号）に掲載された。（嘉納忠明 記）

渝らぬ感謝

隅田川に近い昔の東京京橋区の一角、掘割の水のほひと酒蔵の酒のほひと、時をり近くの芸者屋から屋の稽古の三昧線の音の流れ来る大正二、三年頃の新川新堀。その新川の或るしもた屋のひつそりと奥まつた座敷の隣に、小さな机と本箱とを並べた其家のひとり子私の部屋。そとは晴れやかな初夏六

月の日曜日で、狭い中庭から植込の躑躅や紫陽花の花の色が唐紙や壁に反射し、「空は屋根の上にかくも青く、かくも静か」なのに、後年の私のやうにもつと広々とした山野の自由を樂まうともしないで、「片恋の薄着のネル」に博多の夏帯、しかしもう荷風の情痴と韜晦にも飽き、鷗外の「あそび」にも物足らなくなつて久しい私が、文学者志望のためには両親との離別も止むを得ないと密かに心に決しながら、其頃漸く魂を打ちこみ始めたトルストイやロマン・ローランへの熱烈な傾倒、わけてもその「復活」と「ジャン・クリストフ」とは、その私が、もはや二つとない心の糧とも泉とも火とも鞭とも信じながら、飽かず繰りかへす聖書であつた。

しかし「復活」はしばらく描いて「ジャン・クリストフ」！私は其の一小部分を雑誌「フューザン」の改題した「生活」で初めて読んだのだった。第四卷「反逆」の第一章「流砂」の冒頭の数頁で、これを二回か三回に亘つて高村光太郎さんが翻訳し発表した。一小部分とはいへ真に驚くべきものだつた。その日本文は正に翻訳の龜鑑とも言ふべきであり、作そのものは魂を搖すぶつて精神を奮ひ立たしめること全く倫を絶するていの文学であつた。万軍に匹敵する味方といふ言葉があるが、日本ではまだ殆んど知られず況んや重視もされなかつた此の作者の此の作の、全く小さな断片的な紹介が、詩とヒューマニティーとヒロイズムとの渾然とした文学に、あてもなく鬱勃たる憧れを燃やしてゐた少数の

若く純粹な魂をして、「正にこれだつた！これさへあれば！」と叫ばしめたのである。それは文字どほり「反逆」であり、脱却であり、平凡と卑小とに重たかつた夜を吹きあけられた。私は一冊の文庫本で、何かのはずみに表された。本は一冊の文庫本で、何かのはずみに表された。私はそれが豊島与志雄氏訳の「ジャン・クリストフ」である事を知つた。あゝ、ロマン・ローランの「ジャン・ギルバート・キャナンの英訳四冊で飽かず繰り返しこれを読んだが、やがて其の日本語の翻訳は後藤末雄氏、豊島与志雄氏の手で相次いで完成され、今まで片山敏彦氏が三人目として続けてゐる。

*
戦後を永く住んでゐた信州での或年の夏、私は長野市で話をするために高原の駅から午後汽車に乗つてゐた。雷雨を催した七月末の蒸し暑い午後、松本からラッシュアワーの通勤者や学生で込み合つた列車は、信州を南北とに分かつ麻績（をみ）の盆地を走つてゐた。私は車内の若い人達を観察したり、彼等の会話の断片を小耳に挟んだりしながら、眼は特に、斜め向うの座席にすわつてゐる一人のつゝましやかな娘に注がれてゐた。

きらんと揃へた両膝へ手提袋のせ、小さい書物の頁の上にうつむけた額から娘へかけた時、書物を手提袋へしまつて初めて私と顔を見合はせた其の娘に、「ジャン・クリストフをお読みのやうでしたが面白いですか」と思ひ切つて私は聞いた。娘はちよつと驚いた様子だつたが、すぐ率直に「はい、好きでございます」と言つた。

「さうですか、私も大好きです。今読んでられたのは何巻ですか」

娘は虚を笑かれた。（私とした事が何といふ心無しか！）然し彼女は顔を赤らめながら袋の中をのぞいて見て、「五巻でした。アントワネットのところを読んでゐました」とすなほに答へた。アントワネットか。私も亦何度もそれを繰り返して読み、どんなにこんな姉

う、松本から乗りこむと周囲の賑やかな話声をよそに一人静かに本を読み始めてゐた。

彼女が強く私の注意をひいたのは、然しこにはその読んでゐる書物のためでもあつた。本は一冊の文庫本で、何かのはずみに表された。私はそれが豊島与志雄氏訳の「ジャン・クリストフ」である事を知つた。あゝ、ロマン・ローランの「ジャン・

クリストフ」！それは私にとつても亦二十歳代の天啓の書であり、其後三十幾年を通じて常に変らぬ心の宝となつてゐる。きのふも高原の森の木かげ、羊齒の生ひ茂つた泉のほとりで、其の最終の巻「新らしき日」の数頁を読み返したのだつた。此本にかゝはる幾多青春の思ひ出を遠く、やがて六十歳に垂んどする私が……

を欲しいと思つたことだらう！

「アントワネットは弟のオリヴィエに学資を貢ぐために、知るべもないドイツへもう行きましたか」

「はい。そのドイツで失職してフランスへ帰る途中、すれ違つた汽車の窓にクリストフの眼を見ました」

此時私たちを乗せた列車は冠着(かむりき)の停車場に近づいてゐた。娘は「失礼いたしました」と軽く会釈をして車の出口へむかつた。漸く左右から山の迫つて来た風景の正面に、巨大な冠着山がたそがれの色に包まれて峙つてゐた。停車した駅は小さくて閑散で、三四人の客が黒雲の空を見上げながら急ぎ足で改札口を出て行つた。娘はいちばん後から窓の外を通るとき、今度はじつと私の眼を見ながらそれと分かる親愛のまなざしで辞儀をして行つた。

私はそのうしろ姿を見送つた。つくづくと見送つた。稀に見るやうなけなげな娘の名も知らず、その帰つてゆく家のありかも知らない私、ロマン・ローランを心の父とも慕ひ、その最も愛をこめた数々の手紙を秘蔵してゐる私、しかも其の手紙の一つの中で、田舎に埋もれて黙々と働きながら、偉大な思想や美について読み、考へ、それらを愛してゐるフランスの女達の事を教へられてゐる私、しかもさういふ事どもを一種の心のためらひからあの娘に話してやらなかつた自分を、今ではいくらか悔いである私が。

汽車はたそがれの山々にこだまする汽笛を

鳴らして出発した。つひに雷が轟き雨が降つて來た。私はあの娘が日傘を持つてゐた事を思ひ出した。信号灯の董いろや橙いろが今更に旅をおもはせた。私の汽車は夕立の麻績の

ロマン・ロランと尾崎喜八

関係資料

文集1所収)

ロマン・ロランの友等に

「都新聞」大15・4・7~9

生けるロマン・ロラン(ムール ジャン

ジューイ)(訳)(参)「生命」大15・5~7

或る会合 「都新聞」大15・10・26、27

Marcel Martinet(参)

『築地小劇場』大15・10
叢文閣 昭2・5

『花の復活祭』(訳)

或る仏蘭西の詩人等(参)「詩神」昭3・3

ロマン・ロランからの消息

「東方」昭3・5

『獅子座流星群』の序(訳)

ロマン・ロラン訪問記(訳)「東方」昭3・11

ロマン・ロランとの文通

「東方」昭3・7

ロマン・ロランの近業

「都新聞」昭5・3・25~27

大陸をこえて(参)

偉大なる師への私の感謝(ロマン・ロラン記念号)

「書窓」昭10・6

「音楽研究」昭11・10

「都新聞」昭5・3・25~27

「書窓」昭10・6

「音楽研究」昭11・10

盆地をあとに、轟々と長い冠着のトンネルへ入つて行つた。

(『現代世界文学全集』月報6 新潮社
昭和二十八年四月)

ベルリオツ論(訳)「白樺」大5・4~6
フウゴオ・ウォルフ(訳)「白樺」大5・7
ワグネル(訳)「白樺」大5・9
モツアルト(訳)「白樺」大5・9
リヒアルト・シユトラウス(訳)「白樺」大5・10
クロード・デュビュッシー(訳)「白樺」大5・11
グレトリー(訳)「白樺」大5・12
『近代音楽家評伝』(訳)「白樺」大5・12
再生(訳)「白樺」大6・1
コラ・ブルニヨン(訳)「白樺」大6・5・7
グレトリー(訳)「白樺」大10・3~5
ロマン・ロランの手紙(原文付)「白樺」大11・9
「詩聖」大11・9
「」大11・9
雑記「文学時代」昭4・12
翻訳者と原著者(ローマ字體)
ロマン・ロラン氏の手紙(ローマ字體)
ローマ字大12・1
「ローマ字」大12・2
ユーロープに寄す(訳)
「日本詩人」大13・4 (新らしい風・改題「詩
念号」)
『花の復活祭』(訳) あしかび書房 昭23・9

冠着 「詩文集6」 昭34・8 (〔夕刊信州〕)

昭24・9・11、12)

溢らぬ感謝 『現代世界文学全集(新潮社)』

月報6 昭28・4?

ロマン・ロランと自然 『詩文集8』

昭37・7 (『ロマン・ロラン全集』月報14・15)

昭34・12)

マドレース・ロランのこと(参)

『詩文集8』(「小原流挿花」昭36・6)

過ぎゆく時間の中での(参) 『詩文集8』

(「みすず」昭37・1)

『ベートーヴェンの生涯』 『私の衆讃歌』

創文社 昭42・2 (「音楽之友」昭41・3)

ヒューマニズムの詩人(座談会・尾崎喜八・

伊藤信吉・山室静)(参) 『文学』昭41・8

二つの星 『音楽への愛と感謝』

新潮社 昭48・8 (〔芸術新潮〕昭43・4)

音楽に寄す 『音楽への愛と感謝』

(〔芸術新潮〕昭43・5)

高田高厚との出会い(参)

『音楽への愛と感謝』(〔芸術新潮〕昭43・9)

畠中の小さい巣(参) 『音楽への愛と感謝』

(〔芸術新潮〕昭43・12)

『ベートーヴェンの生涯』(或る文庫版のた

めに) 『タベの旋律』創文社 昭44・6

(旺文社文庫)『ベートーヴェンの生涯』

昭44・4)

ロマン・ロランの声 『タベの旋律』

(訳) 翻訳 (詩) 尾崎喜八作

(参) ロランにもふれて関連あるもの

『詩文集』尾崎喜八詩文集全十卷・創文社刊

参考文献

(ロランと尾崎の関係にふれたもの、或は周辺資料)

『ロマン・ロラン全集』月報昭24・6
片山敏彦・ロマン・ロランの影響諸相

ロマン・ロラン・序(仮訳・倉田百三『出家

とその弟子』昭7)(増田良二訳)

「読書人」昭26・8

ロマン・ロラン・序(仮訳・倉田百三『出家

とその弟子』昭7)(増田良二訳)

角川文庫『出家とその弟子』昭26・8

笠原積資・諏訪に於けるロランの読書会日誌

「ロマン・ロラン研究」No.5・6 昭27・8、10

ロマン・ロラン『ロマン・ロラン全集』71・日本人

への手紙(鶴原徳夫訳)みすず書房昭29・10

新村猛・ロマン・ロランとアジアー死後十周

年を迎えて「日本読書新聞」昭29・12・6

片山敏彦・あの頃の「ロランの友の会」

「文芸」(臨増・高村光太郎読本)昭31・6

宮本正清・ロマン・ローラン隨想

『現代世界文学全集(新潮社)』月報39

蜷川譲・ロマン・ロランと私一回想(『ジャン

クリストフの見える丘』三笠書房昭34・5

中村星湖・ロランに接した頃をありかえつて

「ロマン・ロラン研究」No.46 昭34・12

井口一男・光太郎とロラン

「立教大学日本文学」No.6 昭36・6

兵藤正之助・ロマン・ロランと日本文学

『国文学 解釈と教材の研究』昭36・6

蜷原徳大・ロマン・ロランと日本

『世界の文学(中公)』付録5 昭38・6

荒正人・ロランの影響

『世界の文学(中公)』付録5 昭38・6

新聞・雑誌掲載目録(三)

- 「セガントイニー」 日本詩壇 9 *
「望郷の歌」 詩洋 11
△隨想・雜記▼
- 「念場ヶ原・野辺山原(承前)」 山小屋 1
「ノ」 「ノ」 (三) 山小屋 2
「一日秋川にて我が見たもの『霧の旅』」 霧の旅 5
「追分の草」 都新聞 8・27 ~ 29
- 昭和七年
昭和七年一二十年
* 印は未確認、調査中
- 「青年日本に寄す」 現代 2
「母さま」 婦人俱楽部 2
「桜の木の歌」 詩集 4
「無題」 蟻人形 6
「新戦場」 詩人時代 7
「山間の朝」 雄弁 7
「念場原・野辺山原」 山小屋 12
「Who's who(本人回答)」 読売新聞 2 .
「音楽と文化」 セルバン 10
「ロオトホルン登攀」(ジャヴェル)
山小屋 2
「仏蘭西詩選—或る友の思ひ出に(ルネ・アルコス)、新しい民衆よ(ヴィルドラック)」 詩人時代 5
「北歐の歌」(デュアーメル) 新詩論 10
「春の山あるき」 都新聞 3・11 ~ 14
「私の山の組曲」 帝国大学新聞 5・14
「ハイキング私見」 文芸春秋 6
「山日記から—富士山問答・蝶の採集」 山小屋 6
- 昭和七年
昭和七年一二十年
△詩▼
- 「松井幹雄追悼—思ひ出・霧の旅会弔辭」 霧の旅 10 (No.42)
「しゃじん(童話詩)」 幼年俱楽部 10
「ノエの粉挽小屋(附訳者の言葉)」 (バザルジネット) 新詩論 2
「巴里の破壊」(シオノ) 山小屋 6
「春の渡り」(ジャック・ドウラマン)
野鳥 5
「若い白樺」 若草 1
「冬物語—吾家族に」 山小屋 2
「秩父の早春」 山 2
「K先生」 山小屋 4
「春の徒步旅行」 雄弁 5
「女の小夜薬」 詩集 7
「虹鱒養魚場風景・訪問」 日本詩 9
「美ヶ原熔岩台地・伊那小屋の朝」
日本詩 10
「雲」 音楽評論 11
「春の山あるき」 都新聞 3・11 ~ 14
「御所平」 登山とスキ 1~2
「光を浴びて・春の旅牧場(附写真)」
雄弁 3
「はだら雪の頃」 山 5
「和田峰東餅屋風景」 登山とスキ 1~5
「桑摘む少女のワルツ」 キング 6
「高原の晩夏に寄せる歌」 山 7
「高原の練習曲 1・2・3」 登山とスキ 1~8
「志賀高原」 帝国大学新聞 12・7
△隨想▼
- 「山と音楽」 山 9
「フランスの話」 日本詩 9
「たてしなの歌」 山 10
「たてしなの歌」拾遺 山小屋 10
「武蔵野に光る秋」 帝国大学新聞 10・22
「秋の山地と懷しい人々」 雄弁 12
「手紙」 詩精神 2
「選を終つて」 日本詩 12 (新銳詩人号)
「タン・デラン登攀」(ジャヴェル)
山小屋 1
「春の渡り」(ジャック・ドウラマン)
野鳥 5
「戸隠と妙高」 都新聞 11・2~5
「初めて驚きあり」登山とはいきんぐ 12
「J.O.N.Kと小鳥の森」 野鳥 12
「サランフからロオヌ谷へ」(ジャヴェル) 文芸 8
「冬の夜」(ドウラマン) 野鳥 12
△詩▼
- 「雪の甲信国境野辺山の原越えて・信州峠へ・旅のおはり」都新聞 1・18 ~ 21
「窓を叩く鳥」 野鳥 4
「牧場へ」 帝国大学新聞 4・15
「大蔵高丸・大谷ヶ丸」 山小屋 5
「大陸をこえて」 書窓 6
「私の方法(一)わが子の自然研究指導者としての」 野鳥 7
「私の方法(二)」 野鳥 8
「山で会つた花の思ひ出」 旅 9
「山と芸術(8・21霧ヶ峰「山の会」講演)」 山 9
「J.O.N.Kと小鳥の森」 野鳥 12
「サランフからロオヌ谷へ」(ジャヴェル) 文芸 8
「冬の夜」(ドウラマン) 野鳥 12
△詩▼
- 「個人雑誌『野の花』に就て」 日本詩 1
「雪の甲信国境野辺山の原越えて・信州峠へ・旅のおはり」都新聞 1・18 ~ 21
「山になむ心象の断片」 山小屋 4
「窓を叩く鳥」 野鳥 4
「牧場へ」 帝国大学新聞 4・15
「大蔵高丸・大谷ヶ丸」 山小屋 5
「大陸をこえて」 書窓 6
「私の方法(一)わが子の自然研究指導者としての」 野鳥 7
「私の方法(二)」 野鳥 8
「山で会つた花の思ひ出」 旅 9
「山と芸術(8・21霧ヶ峰「山の会」講演)」 山 9
「J.O.N.Kと小鳥の森」 野鳥 12
「サランフからロオヌ谷へ」(ジャヴェル) 文芸 8
「冬の夜」(ドウラマン) 野鳥 12
△詩▼
- 「美ヶ原熔岩台地(自選詩歌筆蹟)」
書窓 9
「第九」初演當時を顧みて 音楽雑誌
フィルハーモニー 1~2

- 〔或る単独登山者の告白〕 山3
 「五月のメドレー」 日本山岳会・会報5
 「山の春」 東陽5
 「雲に托するメッセイジ」の断片 多磨5
- 〔柄長の一家〕 野鳥6
 「扇山の春」 近代趣味6*
- 〔山の霧(附写真)〕 婦人之友8
 〔印象〕 野鳥8
- 〔秋の詩題〕アサヒカメラ9(臨時増刊)
 「二つの朝」 歴程10
 「偉大なる師への私の感謝」(ロマン ロラン記念号) 音楽研究10
 「赤啄木鳥の紐」 帝国大学新聞10・5
 「ノルウェイ・バンド」 歴程11
 「旅に生きる」 文学案内12
- △評論・感想▼
 「日本鳥学会編・日本鳥類生態写真図集」を見て 野鳥1
 「北の鳥・南の鳥」(下村兼史) を読んで 野鳥9
- 昭和一二年
- △詩▼
 「野良の初冬」 山小屋1
 「飯綱の春」 帝国大学新聞3・20
 「山頂」 家の光7
 「望郷の歌」 世代8
 「哀歌」 都新聞10・24
 △隨想▼
 「我が一日」 婦人画報1
 「灰のクリスマス」 ケルン2
 「忘れ得ぬおもかげ」 野鳥2
 「早春の山郷」 旅3
- 「山を歩いて草花を写す」 アサヒカメラ5
 「諸氏」 アサヒカメラ2
 「冬の旅の思ひ出・好きな冬の旅行地 行・隨筆」 山小屋8
- 〔諸家回答—最も印象に残つてゐる紀行・隨筆〕 山小屋8
- △評論・アンケート▼
 昭和一三年
 「春の山にて・軍道」 山小屋5
 「藤の花房—ジャン・ジオノに」 三十日5
 「人のなさけ」 キング10
 △隨想▼
 「ニュース写真と時局下の歌」 音楽雑誌フ・イルハーモニー1
 「御荷鉾山」 報知新聞2・20、23、24、26
 「蝶の思ひ出とヘルマン・ヘッセ」 帝国大学新聞3・21
 「日常の自然観察(一)停留所の自然界」 (二)雲の観測 いのち7
 「かんたん」 工業大学蔵前新聞8・*
 「森林美観」 旅9
 「草取りの植物学」 野鳥9
 「荒涼への思慕—Yに」 山小屋11
 「信州峰」 登山とスキー11
 「山あるき—学生の“冬季”のために」 帝国大学新聞12・5
- 「樅の木の歌」 山小屋1
 「ガブリエル・フォーレ」 四季2・20
 「修練農場」 キング5
 「追分哀歌」 四季9
 「梅」 科学ペン2
 「峠の早春」 報知新聞2・17
 「山麓の村」 報知新聞2・19
 「山峡の春」 報知新聞2・21
 「早春の田園」 アサヒカメラ3
 「高原の朝」 登山とスキー4
 「早春の雨の夜」 文体4
 「遅れた春の日日から—3・12、13、15、17、20」 山小屋5
 「夕日の時」 アサヒスポーツ5・15
 「単独登攀者のよろこび」 書物展望7
 「夏が又来た」 アサヒカメラ7
 「魅力ある山々・好きな山小屋(諸家)」 旅8
 「日本の山をとこ」 知性8
 「岩雲雀」 銀鐘8・*
 「海」(アンドレ・シュアレス) 音楽雑誌 フ・イルハーモニー16
 「詩—山の朝夕—山の夏の朝(ヘンリー・エク)・高山の夕暮(ヘルマン・ヘッセ)」 山小屋6
- △翻訳▼
 「鶴とづばな」 野鳥4
 「山を歩いて草花を写す」 アサヒカメラ5
 「盛福—木暮理太郎翁に」 歴程1
 「春浅き」 キング3
 「川狩」 小学五年生6・*
 「美酒のやうな幸福(附写真)」 婦人公論7
 「高原」 小学六年生7・*
 「慰問画」 キング11
 「青年の決意—紀元二千六百年の記念祭に当りて」 青年11
 「ブレンネル峠」 山小屋3
 「Wild Life の本」 学鎧3
 「初心者も山へ」 帝国大学新聞4・29
 「三城牧場の春」 東京朝日新聞5・3
 「通過列車」 工業大学蔵前新聞5・*
 「山の朝夕」 山小屋6・*
 「山に思ひ出す人々」 婦人公論6
 「天気図放送」 政界往来7
 「文化映画雑感」 日本映画7
 △評論▼
 「辻村太郎氏と近著『山』」 山小屋7
 「辻村太郎氏と近著『山』」 山小屋7
 「詩—山の朝夕—山の夏の朝(ヘンリー・エク)・高山の夕暮(ヘルマン・ヘッセ)」 山小屋6
- △翻訳▼
 「散文詩—オーヴェルニの歌」(ジアン・アジャルペール) 山小屋2
 「ヴァンデルング—湖と樹木と山と・田舎の墓地(詩)」(ヘッセ) 山小屋2
- △翻訳▼
 「赤星薄羽白蝶(ヘッセ)」 山小屋4
 「農家」(ヘッセ) 山小屋9
 「赤星薄羽白蝶(ヘッセ)」 山小屋4
 「農家」(ヘッセ) 山小屋9
 「山と高原」 山と高原10

昭和一六年

△詩▼

「日常臣道」 キング 4

「隣組常会を歌ふ」 キングダ 6

「大いなる夏(『現代詩人集』)」 少女俱 樂部 8

△隨想・雜記▼

「小手指ヶ原」 朝日新聞 5・31

「新緑の山の朝(附写真)」 婦人公論 6

「文化映画雑感—海洋を拓く・秋吉台」 日本映画 7

「樂しき登山(童話詩)」 小学四年生 7・*

「雲」 三田新聞 8・15

「ノートから—嶋(理研科学映画)・村の崖端(写真と解説)」 アサヒカメラ 11

「サン・ベルナールの犬」 小学六年生 *

△評論▼

「小学校(横浜シネマ)」 日本映画 10

「生態写真作品集—冬のハコベ・晚秋の崖端(写真と解説)」 アサヒカメラ 11

「父の名」 文芸春秋 6

「父の名」 文芸春秋 6

「父の名」 文芸春秋 6

「父の名」 文芸春秋 6

△翻訳▼

「登山家の哲学」(F・S・スマイルズ)

「山小屋」 1

「山火事日和—『天氣の本』より」(C・F

・タルマン) 山小屋 3

「詩—山の夏の朝」(ヘンリーカ・ヘニク) 文庫 8

「詩—山の夕暮」(ヘニク) 文庫 9

「詩—山の夏の朝」(ヘンリーカ・ヘニク) 文庫 8

「詩—山の夕暮」(ヘニク) 文庫 9

△詩▼

「日本文芸」 10

「黒田米子『山の明け暮れ』(書評)」

「朝涼の屋外常会」 文芸春秋 8

「歌はぬピッケル」 日本学芸新聞 8・1

「家」 三田新聞 8・19

「若き応召者に」 文芸春秋 9

「鶴来る」 読売報知新聞 9・8

「雪の峠路」 文芸 1

「烈烈たる元旦」 読売報知新聞 1・1

「大飛行艇」 週刊少国民 2・28

「宵の明星と臘梅」 オール読物 3

「秋の遠足」 文芸春秋 11

「明治節」 少国民の友 11・*

「小包」 日本書新新聞 11・16

「あの日」 文芸春秋 12

「アリューシャン」 文学界 12

「一周年所懐」俳句研究 12

「少年航空兵—『愛國詩集』」 東大陸 12

「我が家」 青少年之友 12

昭和一七年

△詩▼

「少年航空兵」 報知新聞 1・6

「新たなる暦(決戦詞華集)」 サンデー

毎日 1・4・11合

「此の糧(愛國詩特輯)」 文学界 2

「君達に」 青少年之友 *

「峠路で」 婦人公論 3

「少年航空兵」 文庫 3

「特別攻撃隊」 都新聞 3・8

「建設の歌」 日本評論 4

「窓前臨書」 文芸春秋 5

「三粒の卵—組長手記より」 文学界 5

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

「窓」 新女苑 7

「父の名」 文芸春秋 6

「新緑の表参道」 時局雑誌 6

「風の日—組長詩篇」 国語文化 6

「つはもの母の夢」 文芸春秋 7

昭和一八年

△詩▼

「雪の峠路」 文芸 1

「烈烈たる元旦」 読売報知新聞 1・1

「醒めた女性」 婦人公論 11

「我等の勤労」 青少年之友 11

「敢闘に報いん」 読売報知新聞 11・19

「学徒出陣の日」 週刊朝日 11・21

「道義八絃に治し」 中央公論 12

「ちかひの日」 少国民の友 12

「讀ふべきかな」 週刊少国民 12・12

「頼もしい人々」 朝日新聞 1・7

「我が町にて」 読売報知新聞 2・16

「我等かく戰ふ—詩壇」 読売報知新聞 2・17

「帝国海軍への感謝」 大洋 5

昭和一九年

「態勢すでに成る一隣組長は語る」

週刊毎日 4・25

「日掛貯金箱」 オール読物 8

「交声曲『英靈讚歌』を聴いて」 レコード文化 9・*

「育くまれゆく荒鷺」 オール読物 12

「きよらかな比例」 知性 1

「詩を書く若い友人に」 文庫 5

「詩——番人が葡萄園に」(リルケ)

かびれ 7

「ペア・アイランド」(シトン・ゴードン)

山と高原 8

「花の生態(写真と解説)」 写真科学 3

「親切の角度」 週刊毎日 4・2

「町に耕しつづけ」 読売報知新聞 5・19

「詩人言」 詩研究 7

「楽しい家よいお国」 良い子の友 8

「詩の朗誦」 読売報知新聞 8・4・5

「薫隊の心魂に学ぶ」 週刊毎日 12・17

「『をやさんの詩』研究」 詩研究 9

「国こぞる」 青年 1

「軍國の元旦に」 日本少女 1・*

「地底の戦士に寄す」 新太陽 2

「亀鑑眼前にあり」 富士 2

「指揮官機先頭」 少国民の友 2・*

「全国人民結集の秋」 週刊朝日 2・13

「この現実を直視せよ」 読売報知新聞

2・16

「勤労奉仕にて」 かびれ 3

「花環」 日本少女 4

「神々に誓ふ」 読売報知新聞 4・23

「我等動ぜず」 東京新聞 6・18

「厳肅なる時局」 読売報知新聞 6・21

「命を捨てて」 文芸春秋 6

「白鳥陵にて」 日本詩 7

「単独飛行第一日」 詩研究 8

「其の手」 日本詩 9

「こんな处にも」 日本少女 9・*

「山を描く木暮先生・木暮先生」(木暮先生追憶号)

「東亜回天の大機」 読売報知新聞 10・1

「凶敵殲滅の歌」 読売報知新聞 10・16

「備へあれば」 東京新聞 11・3

「われらのみち」 日本少女 12

「花の生態(写真と解説)」 写真科学 3

「親切の角度」 週刊毎日 4・2

「町に耕しつづけ」 読売報知新聞 5・19

「詩人言」 詩研究 7

「楽しい家よいお国」 良い子の友 8

「詩の朗誦」 読売報知新聞 8・4・5

「薫隊の心魂に学ぶ」 週刊毎日 12・17

「『をやさんの詩』研究」 詩研究 9

「国こぞる」 青年 1

「軍國の元旦に」 日本少女 1・*

「地底の戦士に寄す」 新太陽 2

「亀鑑眼前にあり」 富士 2

「指揮官機先頭」 少国民の友 2・*

「全国人民結集の秋」 週刊朝日 2・13

「この現実を直視せよ」 読売報知新聞

2・16

「勤労奉仕にて」 かびれ 3

「花環」 日本少女 4

「神々に誓ふ」 読売報知新聞 4・23

「我等動ぜず」 東京新聞 6・18

「厳肅なる時局」 読売報知新聞 6・21

「命を捨てて」 文芸春秋 6

「白鳥陵にて」 日本詩 7

「単独飛行第一日」 詩研究 8

「其の手」 日本詩 9

(1)、目録(2)で何よりも著しい特徴は、「山を描く木暮先生・木暮先生」(木暮先生追憶号)

尾崎の山や自然への熱い傾倒である。

それは独自の山の詩文を産み出し、後に

に、自然詩人或は山の詩人と呼ばれる

基盤を形成したことはよく知られている。

●かかる尾崎の成功の一因に、期を同

じくして山の雑誌が出了ことが考えら

れる。それまで学校山岳部や各山岳会

による会誌等がおあつたが、登山やハイ

キングの市民への普及とともに一

般読者を対象にした商業誌が相次いで

創刊された。

例えは「山と渓谷」昭和5年に、「ア

ルピニズム(数号で「登山とスキー」)

昭和6年、「山小屋」昭和7年、「ハイ

キング」昭和7年、「ケルン」昭和8

年、「山」昭和9年、「登山とはいきん

ぐ」昭和10年、「山と高原」昭和14

年等である。尚、「山と旅」は大正十

一年からあつたが詳細不明。

●尾崎は寄稿の他、種々の会に入り、

活動したことを見逃せない。

昭和5年に、東京植物同好会(牧野富太郎)昭和5年?、日本山岳会昭和八年、

山小屋俱楽部昭和十年、日本生態写真研究会(清櫻幸保)昭和十一年、風景

研究会(西悟堂)には創刊号昭和九

年五月号から寄稿し、探鳥会にも参加

している。

（2）、尾崎の本業たる詩作の発表は、目

録(2)及び散文と比べて減少する。これ

に関連して、参考になると思われるの

で次の尾崎の言を挙げておきたい。

●「日本詩」昭和十年一月号の「揮毫

の詩」で、尾崎は個人雑誌「野の花」

の刊行にあれて、「……」とある。しか

しこの個人雑誌は実現しなかつた。

●「現代詩人集第五卷・尾崎喜八篇

「昨日の歌」(昭和十五年九月二十日

山雅房)の「作者の言葉」に、「詩は

つねに書きながら、いつもも無しに謂

ふところの詩の雑誌に発表する事をや

めてからもう幾年になつた……」とあ

る。

●そして、「此の糧」一篇の好評の後、

戦時中三年間の発表となるのであるが、

編者は判明したもの総てを記載してい

る。

(3)、目録(2)に於て活潑であったヨーロ

ッパの詩や詩人の紹介が、ヘッセやデ

ュアルの訳書があるものの減少する。

又、ロマン・ロランとの通信も疎遠に

なるのである。(ロマン・ロラン全集

「日本人への手紙」みすず書房参照)

尚、資料収集に当つて新たに、小学

館、家の光協会、北海道大学図書館、

東京工業大学図書館に御協力を得た。

「モソアルト」(ロマン・ロラン) 白樺

大5・9

この一年のできごと

二月一日、生前親交のあった方々によって行われている蠟梅忌第十二回が、東京青山の青山荘で出席者八十七名によって行われた。司会＝伊藤海彦氏。お話を「高村光太郎から結婚祝いに贈られた聖母子像について」北川太一氏（高村光太郎研究家）、「昭和初期の喜八撮影の写真について」尾崎栄子。尾崎喜八生前の録音三篇、隨想「寂しさと桜草と」。挨拶＝串田孫一氏。

尾崎喜八研究会機関誌「尾崎喜八資料」刷上り、二月～二月上旬各会員に送付。

四月十二日付朝日新聞夕刊、人（きのうきよ）欄に「光太郎の贈り物と四十一年ぶりに再会」のタイトルで聖母子像の記事載る。五月六日～六月一日、東京セントラル美術館で催された「the光太郎・智恵子展」に聖母子像出品。

写真週刊誌フォーカス五月二十三日号に「光太郎の母子像初公開——四十年ぶりに発見された詩人尾崎喜八への結婚祝い」と題して掲載される。

八月三十一日、長崎県諒訪郡富士見町高原の森で碑前の集い第七回開催。挨拶＝中山政市氏（富士見尾崎会代表）。お話を伊藤海彦氏・石黒敦彦（北川太一氏に代り聖母子像の説明と披露）。尾崎の詩、隨想の朗読の録音を聞く。その後希望者は入笠会館にて懇親会。参加者約五十名。

*

毎年八月の最終日曜日午後一時半から、富士見町高原の森で碑前の集いが富士見尾崎会の主催で行われております。碑前で約一時間半、その後希望者は懇親会（会費四千円）に出席します。参考ご希望の方は六月末までに当研究会宛にお便りをお願いします。七月末までに詳細のご案内をするよう主催者に依頼いたします。

〔新刊のお知らせ〕

『ペートーヴェン』尾崎喜八 三五〇部限定 予価三五〇円（送料別）六十二年二月刊行予定。申込みは〒171東京都豊島区南長崎一一七一八 編集工房水族館宛に葉書でお願いします。内容は昭和二十四、五年頃、尾崎が松本市で行なった講演「ペートーヴェン」の要綱で、自筆原稿を写真にとり一色オフセット印刷したもの。表紙串田孫一、後記尾崎栄子、五二頁。

*

今年も又、会員各位から作品の初出と思われる新聞・雑誌の切抜き、放送の録音、第三者の書かれた尾崎関連記事、色紙のコピードをお送りいただきました。各担当者一同厚くお礼申し上げます。（尾崎栄子 記）

こばねばなし

今年も又、会員各位から作品の初出と思われる新聞・雑誌の切抜き、放送の録音、第三者の書かれた尾崎関連記事、色紙のコピードをお送りいただきました。各担当者一同厚くお礼申し上げます。（尾崎栄子 記）

尾崎喜八資料・第三号

一九八七年二月四日発行・非売品
発行・尾崎喜八研究会

鎌倉市山之内一九七一五一（〒247）

電話〇四六七（二三）一七六一

印刷・内藤順司

川口市芝中田二一十一五

名前だと思い込んでいたんだね……

『高層雲の下』は大正十三年六月に新詩壇社から出版された第二詩集である。その中身は現在刊行中の尾崎喜八詩文集『空と樹木』の中に収録されている。

自然科学の勉強に本格的に打込んだのは昭和になってからだが、気象を学び、後には自ら『雲』（昭和十七年、アルス発行）という写真集まで出した人だが、植物や昆虫にいたるまでよく観察し、名前を正確に調べ、人にもそういう観察態度を強いた父なのに、未熟からとはいえ後に内心忸怩たるものがあつたろう。その詩を読んでみると、たしかに高層雲ではなく、高積雲も巻（綱）積雲に近いものがびつたりするように思われる。子供心にどうしてお父さんはお天気の下り坂に出る雲、青空が見えない高層雲なんかを本の名前につけたのだろうと不思議に思った記憶がある。

高積雲とは俗にいわし雲・うろこ雲といわれている雲である。

一緒に野山を歩いて、植物や小鳥のテスト癖に悩まされた人々、もつと早くこんなエビソードをご存知だったならよかったです！

（尾崎栄子 記）

いつかこんなことをフッと言ったことがあつた。「詩集の『高層雲の下』の書名はね、本当はあの雲は高層雲ではなくて高積雲だったのだよ。当時は雲の事を今のようによく知らなかつたので、高積雲の事を高層雲といいう